
鋼鉄の渡り鳥

def

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼鉄の渡り鳥

【Nコード】

N8778E

【作者名】

def

【あらすじ】

呼び出されたロディくんが奮闘する話。

プロローグ 1 - 1 (前書き)

この小説は二次創作になります。何か問題が御座いましたら連絡を下さるようお願いいたします。然るべき対処をさせて頂きます。

その他、素人の文を読めない方も戻られたほうが無難だと思います。情けない話ですが自分はワイルドアームズの著作権など良く分からない状況での執筆となります、もし禁止されておりましたら、直ぐ様削除させて頂きます。

以上前置きです。お目汚し失礼しました。

プロローグ 1 - 1

命の積みかさねによって開かれる世界の未来。命こそが未来であり、命はまた世界の至宝である。

数多の命が織り成す世界の未来は、永遠に続くと思われ、誰もが信じて疑わ無かった。

デ・レ・メタリカ“ はじまりの歌” より

アースガルズが《神々の砦》とまで呼ばれ更に魔術回路によって強化された対消滅バリアを張り、マルドゥークから力・ディングルへと通じる亜空間内での戦闘の余波を必死で食い止める。

その余波は眩い光と圧倒的な破壊の風となってバリアを叩く。

既にアースガルズの片腕からは蒸気が吹き出し、ルーン・ドライブに僅かな罅が入り初めていた。

徐々に後退せざるを得ないアースガルズ。

遂には膝を付いてしまった。

その姿にロディ達は息を呑んだ。

以前、フォトスファイア侵入の際に容易くバリアを打ち破った事のあるアースガルズである。

彼等は《神々の砦》が負ける筈が無いと思っていた。

しかし、今もアースガルズの右腕の一部が砕け、風に散っていった。

だが、アースガルズは退くことを良しとはしなかった。

衝撃波などに自分の誇りと言えるバリアを破られる訳にはいかず、何より誇り自らの主達のためにこの身を退く訳にはいかなかった。機械である自分にも心はあるのだ。

アースガルズは雄叫びの変わりに蒸気を一つ吹き上げた。

「アースガルズッ、もう、もうやめてッ！ このままじゃアナタまでッ………！」

「ハンペンツ、なにかねえのかよ！」

「オイラだってあれば言ってるよッ！ だけど、僕達にはどうしようも無いんだよッ！」

「アースガルズを信じるしか無いんだッ！」

「……。」

博識で頭の回転も早いハンペンが諦めたように頭を垂れた。

（信じるしか無い、か……）

ロディはハンペンの言葉の意味を理解していた。

それは、諦めだった。

アースガルズは既に満身創痍。

セシリアの魔法も僕達を守ることでは精一杯。

僕は手を貸す事も出来ない。

長く荒野を渡って来たというのに、魔法も使えない。

剣の腕もザツクには到底及ばない。

頼りのARMも現状を打ち破る事は出来やしない。

（僕はなんて情けないんだろう……）

ロディが悔しさに拳を握る間にも、アースガルズは雄叫びを上げている。

昂るアースガルズの感情に反し、ロディは悔しさが増すばかりだった。

強いアースガルズの想いにシンクロしたロディには感じられるのだ。

戦闘用ではないゴーレムとして、“守る”という行為がどれだけの重みがあるのか。自分にその重みを教えてくれたニンゲン達を守れるということがどれだけ誇らしいか。

例え、永遠の眠りに就いたとしても絶対を守り抜くのだ。と。

それは死を知らない機械故の決死の覚悟。

（……機械？ そうかッ！）

そこまで考えたロディは不図、自分が忘れていた事実を思い出し

た。

「……はは、僕は馬鹿だ、そんなことも忘れてたなんて」
ロディは閃いた。

唯一、この状況を打開できる方法を。

（“同族”である僕にならんとかなるかもしれない）
ホムンクルス。

この体は誰かを助ける事が出来る事のため。

ロディは荷物の中から、一際大きいバレットを取り出し、腰に下げたベルトに取り付けると、アースガルズへと足を向けた。

踏み出した一歩に迷いは無い。既にロディの覚悟は決まっていた。

「ロディ……!？」

「おいおい、坊主どうする気だ!？」

何かを雰囲気を感じとったのだろう、ザックとセシリアが不審気に声をかけてくる。

しかし、ロディは振り返らずに前を見据え、風を切りながら真っ直ぐに進んでいく。

ロディはゼペットの言葉を思い出していた。

「痛みを知る人間こそ、誰かを救うことが出来るのじゃよ。

お前は優しい子だ。

きつと、誰かを助けてやる事が出来るだろうよ」

ゼペットの言葉に、背中を押して貰っているような感覚を覚える。

ロディはいつの間にか駆けだしていた。

（走りだしたんだッ！もう立ち止まらないッ！）

そう、ロディは駆け抜ける。

荒野の果てまでも……

プロローグ 1 - 2 (前書き)

悩んだ結果独自の設定で執筆させて頂くことになりました。
矛盾が多々あると思いますが生暖かい目で見守ってやって下さい。
お願いします。

プロローグ 1 - 2

アースガルズへと向かい足を踏み出したロディ。

既にアースガルズの心とのシンクロによって、力が満ちていた。

掌が添えられたARMも呼応し始め、最強のARMであるアークスマツシャーの形を取ろうとひとりで姿を変えていた。

地についた膝を足掛かりにアースガルズによじ登ると、右腕の吹き飛ばされ、ショートしている部分へ近づぐ。

そして、躊躇なくその部分へ左腕を突き刺した。

「ッ、何をするつもりですかロディッ」

瞬間、信じられないといった顔で叫ぶセシリア。

確かにアースガルズの傷を抉るなど狂ったと思われても仕方がないかも知れない。

しかし、ロディには傷つける積もりなど無い。

ロディはアースガルズとのシンクロが更に高まった事を感じていた。

アースガルズとの直接のシンクロにより、直に感情に触れる事が出来た。

絶望的な状況にも関わらずに心が高揚してくる。

恐らく僕は笑っているだろう。

アースガルズのただ純粹な、綺麗な感情は、同じ機械の体を持つ身として誇らしく思える。

ザックとセシリアが後ろから切迫詰まる声でいさめてくるが、止まらない。

申し訳ないと思うが、そんな二人だからこそ僕は“仲間”という掛け替えのない物を感じる事が出来る。

僕を無条件で心配してくれる二人だからこそ行けるのだ。

(ただ、アースガルズの覚悟に影響を受けただけかも知れない。

「だけど、なんとしてでも君達を守りたいんだ。」

ロディは今までで最高と思える微笑みを二人へ向けた。

綺麗な笑みだった。

それは、余りにもこの状況に似合わない笑みであった。

「ッ！ そうか！

……わかったよロディ。今から君のやろつとしている事が！」

何かを察したハンペンが叫ぶ。

「あつたんだ！ まだこの状況を覆す方法があるということがッ！

忘れていた、君の左手は生きる金属、ガーディアンブレードで作られていたんだ！

そして、その左手を通じてアースガルズへ直接シンクロしたんだろっつ？

アースガルズとシンクロした状態で放つアークスマッシュなら、あるいは覆す事が出来るかもしれないさ。

でもッ！ 君は分かっているのか？

そんな無茶なシンクロなんてどれだけ体に負担が掛かるかッ！

君の命まで危ないんだぞッ！」

命の危険がある。ハンペンはそう言った。

それでも、分かっているとでも言うように、ロディの微笑みは崩れることは無かった。

ロディは衝撃波へと振り向き、よろめきながらもアークスマッシュヤーへと完全に姿を変えたARMを構えた。

力の高まりからなのか、ARMが脈動しているかのような錯覚に陥る。

だが、高まる力はロディをも傷つけていた。

ロディはアースガルズとのシンクロの段階で全身を焼くかのような痛みに襲われていたのだ。

今やロディの身体中、至るところで血が吹き出していた。

しかし、痛みど無いかのようにARMを股に挟み、右腕で器用にバ

レットを装填すると、照準を合わせた。

広域を相転移させる効果のあるアークスマツシャー。それを今までとは違い、仲間達を守るため衝撃波に対し、盾のように拡がるように狙う。

(この一発の間、もってくれよッ！)

チャージを開始したアークスマツシャーにエネルギーが溢れんばかりに流れ込む。

「凄い……」

セシリアは思わず声を漏らした。

今まで放ってきたアークスマツシャーの中で最高の輝きとエネルギーの大きさだと、目に見えてわかったからだ。

「それに、これは何？」

エネルギーの奔流から何かが流れてくる。

それはロディの声にもアースガルズの唸りにも聞こえる気がした。いや、恐らく気のせいではないのだろう。

暖かなそれは、アースガルズとロディの感情そのものなのだと、セシリアは思った。

だが、その節々に覗く、酷く泣きたくなる感情はなんだろうか？セシリアは無性に不安になった。

「ロディッ！ お願いですから、無理をしないで下さいね……」

ロディが眉を寄せた。

アークスマツシャーの制御と身体中に走る激痛に、集中が途切れ途切れになってしまっていた。

そんな中、遂にチャージは完了し、後は引金を引くだけになった。

ロディはすぐには引金を引かなかった。何回も頭の中でシミュレートしてみたが、非常に狙いが狭いのだ。

しかし、時間をかければ身体中の痛みが増して、更に時間がかかってしまう。

ロディは今までに無い程の重圧を感じていた。

(ロディ、無理しないで……)

(頼んだぜ。そして、死ぬなよ)

(ロディ……)

そんな時、仲間の声が聞こえた。

重圧に負けそうな自分を信じて、励ましてくれていた。

背中を押してくれる掌が増えたのだった。

遂に銃口が定まった。

先程の躊躇が嘘のように、ロディは指に力を込め、引金を引いた。

閃光が走る。

耳鳴りのような音を立てながら炸裂するアークスマッシャー。

一瞬だった。

一瞬で、大地を揺るがすような振動と鼓膜を叩く音は、突然吹いた暴風により切り裂かれ、掻き消されたのだ。

静寂。

耳鳴り以外、世界から音が止んだ。

セシリア達は直ぐには衝撃波が去り、助かったのだと気付けなかった。

ただ、急に認識が広がったのを感じた。

そして気付いた。

随分と長い間、衝撃を防いでいたと思われたが、実際は筈かな時間であったということ。

“ 滞っていた時間は消え去った。 ”

まるで、時に酔った様な不思議な感覚。

引き戻された時間に順応しきれず、一瞬なのか数瞬なのか分からない

いが身体が呆けていた。

しかし、視界に荒野へ崩れ落ちたロディを目にした途端、意識が急速に浮かんで来る。

「ロディッ!?」

セシリアが悲鳴を上げながらロディへ駆け寄った。

(ッ……………!?)

ロディを抱き起こそうとしたセシリアは息を呑んだ。

身体の至るところにある傷から血が流れ、苦しそうに震えている。

ロディを優しく抱き起こし、魔法による治療を試みながら、強く手を握りしめ、何度も呼び掛ける。

「大丈夫ですかッ!? 今、治してあげますからねッ! 直ぐに元気になるますからッ!

……………絶対に、絶対に……………元気になるますからッ!

身体を包む温もりと聞き慣れた声に、ロディの震えが止まり苦しそうに歪む顔がほんの僅か柔らかくなった。

その様子に安心したのか、シリアは涙を流しながら笑みを浮かべた。

「……………絶対たる力か……………」

そんなやり取りを見守っていたザックが呟いた。

何かを含んだ呟きに肩に乗るハンペンが耳を側立てた。

だが、真面目なザックを茶化す様子も無く、瞳に真剣輝きを写し、何かを考えているようだった。

「なあ、これも一つの“絶対たる力”なんだろうな。

アースガルの意思も。

坊主の捨て身の覚悟も。

治すから。と綺麗に笑う姫様の強さも。

俺はまた一つ学んだよ。

決められた絶対なんてないんだな。」

ザックは虚空を見上げながら呟いた。

その呟きには様々な感情が込められてるのだろう。

しかし、それでもハンペンはずツクに取り合わず、思い詰めた様に口を開いた。

「そう……そうなんだよ！」

二重のシンクロなんて必死とも言える捨て身の攻撃だった……

なのに、ロデイにはあれだけしか傷がないのはおかしいッ……」

何か焦っているハンペンにズツクは小馬鹿にした様な目を向けた。

「おいおい、今、姫様がそれこそ全力で治療しているじゃねえか。

それに、十分に重傷だ。んなこと言っていると姫様に怒られんぞ？

まあなんにせよ、坊主のおかげで衝撃波も防げたし、一件落着だ。

それともなんだ、さつきから現実逃避したままなのか？」

ククツと愉しそうに笑うザツク。

しかし、次のハンペンの言葉には笑みを止めざるをえなかった。

「外傷が少なすぎるんだよ！」

あり得ないくらいにねッ！

……もしかすると、もしかするかも知れないよ……」

プロローグ1-2（後書き）

やっちまった感が既に漂っていますが、ロディにはホムンクルスと言っことで魔術回路というシンク口の為の独自の設定を設けさせて頂きました。

そういえば、面白いゲームが幾つか候補が上がっております。クロス先は後ほど発表させて頂きます。

……それにしても行き当たりばったりですな

プロローグ 1 - 3

元来、ホムンクルスとは人型をしたARMである。

普通のARMならば先程のアークスマツシャーによりスクラップだろう。

瀕死とは言えロデイが生きていられたのは、皮肉にも自らが忌み嫌うホムンクルスという在り方であった。

しかし。

(ロデイに負荷が掛かりすぎている……)

それが何を意味するか4000年もの間生きてきたハンペンを知っていた。

(僕は知っている……暴走したARMの果てをッ！ホムンクルスの末路をッ！)

ザックにはハンペンの言葉を俄に信じられなかった。

今までだって死にそうになったことは何回もあるし、まして心臓が止まったこと迄ある。

そして、その度にセシリアの魔法やガーディアンなどの治療で事なきを得てきた。

死に体の状態でも治して来たセシリアなのだ。

「なあーに、今回も治してくれるさ。

それに、ロデイに対する治療なんだ。

“愛の奇跡”とやらを捧めるさ。」

いつも以上に必死なセシリアを指差し、ハンペンを鼻で笑うザックだった。

だが、遂にセシリアの愛の奇跡は起こらなかった。

セシリアの懸命な治療により傷は塞がり、息をしているロディだが、何故か目を覚ますことはなかった。

そして、アースガルズも誇らしさを感じさせる恰好をしながらも永遠とも言える眠りに就いた。

魔族との決着が着いたこの日、一部を除く前大戦からの遺産がフアルガイアから消えたのだった。

既にアースガルズが眠りにつき、ロディが倒れたあの日から二日が経った。

あの日、ロディはアーデルハイドのエマの家に運び込まれた。

機械に詳しく、ARMマイスターであるエマは一縷の希望であった。そんなエマは帰って来た一同の余りにも必死な様子に目を屢叩いた。

エマとしてみれば魔族と決着を着けに行つた彼等の帰還。それは英雄の帰還である。

突然響いた我らが姫様の声に嬉々として出迎えようと一階へ降りてみれば、彼等の一人であるARM使いが剣士に担がれており、姫様が目を真つ赤に腫らし、大声で泣きついて来たのである。戸惑うのも無理はない。

だが、いつまでも戸惑っているエマではなかった。以前にも似たような事があり、状況も酷似している。エマは両頬を軽く叩き気合いを入れて尋ねた。

「今回は一体全体、どうしたのかな？ 君達ッ！」

だが、エマは話を聞くだけのことに何故か骨を折ることになった。

セシリアは泣きながら話す為に良く聞き取れない。 剣士に聞くにも現状を理解出来ていないようなので問題外。

なので比較的平静保っているカゼネズミから話を聞くことにした。

推測まじりの話を聞いたエマには何かの冗談にしか思えなかった。
(ホムンクルスの許容範囲を超えた稼働ですってッ？)

今回ばかりは私じゃ手の施し様がないわ)

結果を心待ちにしている一同に黙々と診察をしていたエマが口を開いた。

「……少年の関係者、今すぐ集めてッ」

そして次の日。

アーデルハイドにある病院へ移されたロデイの元に関係者が集められた。

ジェーン、マクダレン、マリエル、バーソロミューといった面々である。

全員が文字通り飛んで来たのかというほど早かった。

なんせ、ジェーンとマクダレン、バーソロミューは外海にいたのである。

報せが届いてから不眠不休で船を進めたのであろう。タウン・ロゼッタにいたマリエルにしてみてもエルウ達の技術としか説明しようがないほど早かった。

しかし、集められた誰もがロデイの姿を見て何かを感じ取った様だった。

彼等が来た途端に病院の雰囲気が重くなる。

重たい雰囲気にはやられたのか隣の患者が呻き声を漏らした。

その時、丁度エマが現れた。

「うんッ！ 既にみんな集まっているようね。

偉いぞッ！ それじゃ、少年が眠りに就いた原因について説明するわねッ」

エマは一同を見渡し頷き説明を始めようとした。

「……眠りに就いたって何よッ？」

しかし、泣きそうな顔をしたジェーンにより阻まれた。

それは彼女にとって看過出来ない内容だったらしい。

だが、エマはそんなジェーンを一瞥したのみで説明を続けた。

「みんなが知つての通り、少年達は魔族と決着を着けに行つていたわね。」

その時に亜空間内での戦闘があつたらしいの。

亜空間内つていうのはとっても不安定で、戦闘なんか持つての他なんだけどね。

お陰様で亜空間が崩壊して、そのとてつもない余波に襲われたつて訳。

そこでアースガルズと少年が滅茶苦茶な力で余波を防いだものだから、二人共機械の体が壊れて自動的に眠りに就いてしまった訳。

「おわかり？」

質問を与える隙もなく一気に捲し立てた。

その内容は軽い口調だつたものの、全員を例外無く絶望させた。

魔法を掛けられた様な沈黙の中、小さな手が挙げられた。

「あの……ロディはどの位、眠りに就くのでしょうか……？」

マリエルが沈黙を破つたのだつた。

「んーそうね、前大戦の折りのゴーレムと同じ位じゃないかしら？」

少なくとも私達が生きている間には目を覚まさないでしょうね……」

……

その長さに何人かが息を呑む。

そんな中マリエルは違う意味で息を呑んだのだつた。

永遠を生きるとされるエルウである。

前大戦の折り、詰まり1000年と言われてもそれ程の動揺はない。

しかし、マリエルが息を呑んだ理由は自らの長命さからであつた。

（私はなんてことを……ロディが目を覚ます頃には皆さんはいないのに……）

エルウである自分が先程の質問をしたことをとてつもなく後悔していた。

マリエルはセシリアやジェーンに合わせる顔が無かつた。

二人から何を言われても不思議ではないのだ。
目を瞑り、手を強く握りしめる。

「では、ロディに命の危険があるという訳では無いのですね？」

……よかった。

と小さな呟きが聞こえて来た。

マリエルは勢い良く顔を上げる。

そこには涙を浮かべながらも微笑み、ロディの頬を撫でるセシリアの姿があった。

そして更に。

「そう、そうよねッ。

死んじやいないんだものねッ。

今度こそ、私達がロディを守る番だわッ！」

ジェーン迄も微笑む。

「そうだな、俺達がきちんと子守してやらねえとなッ！」

「ザックが近くにいと煩くてロディも寝ていられないんじゃないかな
いかな？」

「お嬢様、ご立派になりました……」

ありがとうございます。

それもロディ様のお陰でございます。」

二人を皮切りにして、憎まれ口を叩くザック。

ザックを茶化すハンペン。

ロディに頭を下げるマクダレンと続いた。

そしてセシリアが呆けているマリエルに向かい微笑む。

「ロディが起きましたら、マリエルから言っておいて下さい。

“おはよう”って。

残念ですが、私達では伝えることが出来ないようです……

お願いしますねッ！ マリエル」

マリエルは思わずセシリアの微笑みに見とれてしまっていた。

それ程の笑みであった。

「あ、あの、その……」

「私からもお願いするわ。」

本当は直接言っただけでやりたいけど……

ロディが起きた時に一人だけだと寂しくて泣いちゃうだろうし」

マリエルの目が更に涙を湛える。

「はいッ！まかせて下さいッ！」

私、私、ロディに皆さんのこと沢山、たくさんお話してあげますからッ！」

そんな言葉が自然と出ていた。

プログラマー・ラスト（前書き）

やっとプログラマー終わりです。

それにしても、もの書きって難しいですね。

プロローグ1・ラスト

ロディは無限連環永久機関。

同じくアースガルズはカ・ディンギル跡にそれぞれが眠る事になりました。

エマ博士の家にロディが運び込まれた次の日に皆で決めました。

ロディの為にモンスターが跋扈する場所や人が簡単に出入りする場所を避け。

アースガルズの場合は私達が皆と過ごした日々を忘れないようにと。

そして、今日アーデルハイドで形だけの葬儀を執り行い、それぞれの場所に運ばれる予定です。

それは詰まり、今日でロディとお別れ。と言うことで……。

棺に入れられたロディの周りを誰もが離れようとしないう。しょうがないと思う。

私だって今日はずっと傍にいと決めていた。

それにしても、皆さんが揃って正装をしているなんて……。

もし、ロディが今日目を覚ませば

「なんだ、夢か」

だなんてまた寝てしまいかも知れない。

楽しそうな想像に頬が緩みそうになる。

しかし、笑うことは出来なかった。

泣きたくなつた為に。

「それにしても、コイツが起きる頃にはどうなっているのかしらね。このファルガイアは」

ロディを挟み向かいにいたジエーンが呟いた。

正装のジエーンは普段のお転婆さを微塵も感じさせなかった。

今回の事で彼女も思う事があつたようで、渡り鳥を辞めるらしくつた。

「多分……今よりもずっと豊かで素敵な世界になっていますよ。

ファルガイアには希望の西風が吹きましたもの」

そう、ロデイの為に、私達自身の為にファルガイアを豊かにして行かなければならない。

それは生き残った人間の、ファルガイアのガーディアンたる人間の仕事なのだから。

「それもそうね、コイツが起きた時、失望なんてされたくないしね」

私とジエーンは共に微笑んだ。

その時、部屋の扉がノックされ、扉が開いた。

「失礼致します。皆様、御時間が近づいて参りました。準備をお願い致します。」

ヨハネが時間を報せに来た。

「ッ……！？ やばッ！ 忘れてた。

あ、あのさセシリア、棺の中に物を入れても大丈夫？」

すると、何故かジエーンが慌てた様子で聞いてきた。

「ええ、大丈夫だと思います。その方がロデイも喜ぶと思いますし」

「本当！？

ごめん、少し待ってて！」

それだけ聞くとジエーンは部屋を出ていった。

「なんだあ、ありゃ」

一同を代表した眩きがザックから漏れた。

呆気に取られた一同だったが、帰って来たジエーンを見て納得した。

ジエーンは綺麗に包装された箱を持って来たのだった。恐らく目覚めたロデイへのプレゼントだろう。

それにしてもいつの間に用意をしたのだろうか？

「そちらには何が入っているのですか？」

少し気になったセシリアは彼女に尋ねた。

「それは秘密よ。」

彼女は何も答えなかった。

そんな彼女は、プレゼントをそつとロデイの棺の中に入れた。

そのままロデイを眺めていたジェーンは、ロデイの頬を撫でると、唇を柔らかく触れ合させた。

「なッ!? 何を」

しているんですか?

と続く言葉はジェーンによって阻まれた。

「良い? ロデイ。」

ここまでしたんだから絶対に私を忘れるんじゃないわよ……

忘れたら許さないんだからッ!」

涙を堪え頂垂れるジェーンの姿を目にしたら、咎められる訳がなかった。

しかし、再び唇を触れ合わせ始めたジェーンを見て、セシリアはこのまま何もしない訳にはいかない気がした。

セシリアは辺りを見回すが、綺麗に整頓された部屋の中に私物は見当たらない。となると。

セシリアは一つだけ身につけている装飾品を思い出した。

胸元から紐を手繰り寄せ、その先の淡い光を見つめる。

(そう。これは唯一、今私が彼に託せる事が出来る物)

セシリアはジェーンを退かすと、首から下げた“なみだのかけら”を外し、ロデイの首へと移す。

そしてジェーンと同じ様に柔らかくキスをした。

「なあ、姫様。そいつを渡しちまって、大丈夫なのかよ?」

「良いのです。これはとーっても大切な物ですが、だからこそです。」

それに、必要になった時は取りに行けば良いだけですよ。

一番安全な場所ですし」

と呟いたセシリアにザックは参ったと思わざるをえなかった。

結局、全員がロデイへのプレゼントを渡した。

身につけている装飾品や、花、中には武具を入れた者もいた。

その後の式はセシリアを司祭に頂き、滞り無く進められた。

式には世界を救ったという少年の為に、各地から大勢の人が集まり祈りを捧げた。

アーデルハイドに《光の都》を象徴するかのように光が満ちたこの日、ロデイは無限連環永久機関で眠りに就いたのだった。

ブローグ1・ラスト（後書き）

次回からクロス物となります。

“ワイルドアームズ”を壊さない様に頑張りたいと思います。

……既に壊れているかも知れませんが（＾|＾；）

第一話

幾度も幾度も呪文を唱えた、回数は既に数えていない。

周りの罵声に心を折られそうになりながら必死に呼び掛けた。声を枯らしてしまいいなくなった時に“それ”は現れた。

ゴウ、という風の音と共に視界を光が覆った。

それはサモン・サーバント特有のゲートだった。

しかし、その光は見慣れた光よりも強く光を放っているように思えた。

「……………全く、なにをしてくれている」 光が収まったそこには不機嫌な様子で溜め息を尽く猫がいた。

猫と言えど、それは普通の猫では無い事は明らかだった。

何しろ宙に漂うかの様に浮いている。

まして猫は喋らないし、服を来ていない。

(ゆゆゆ夢じゃ無いでしょうね？)

人の言葉を使い、空を飛ぶ使い魔を召喚できるなんて!?)

猫を召喚したであろう少女は目の前の光景を信じる事が出来ずに頬を經る。

(痛い…………)

徐々に涙が溢れて来る。

それは、現実だと言うこと。

少女は次第に頬の痛みからではなく歓喜から来る涙を流し始めた。

(ふ、ふふふ、もう誰にもゼロだなんて言わせないんだからッ！)

「聞いているのか？」

感極まる様子の少女は猫の質問に引き戻された。

「あ、忘れてたわ。」

貴方は今、私のサモン・サーバントによって呼ばれたわけ。

つまり、貴方には私の使い魔になってもらうの「

「ふむ、成る程。

だが、承諾は出来んな」

「ダメよッ！

もう決まっちゃったもの。

諦めなさいよ」

「……まだ寝ているこの子を勝手に呼び出すなど、戯れも程々にして貰いたいものだな」

猫は鋭利な眼孔を辺りに走らせ、全身の毛を逆立たせた。

猫は地面に降り立つと、いつの間にか草の上に横たわっていた少年を優しく抱き上げる。

興奮の余り、少年に気が付かないでいた少女もその光景に少々頬を歪ませた。

「な、何よ、ソレ!?!」

不図、猫は遠い目をした。

(それにしても随分と人間地味てるわね。頭が良いのも考え物なのかしら?)

いいえ、使い魔になるんだもの、支障はないわね。むしろ喜ぶべきよッ)

「オホンッ……ミス・ヴァリエール、儀式はまだ終わってはおりませんよ。

ただでさえ遅れてしまっているのです、早く契約を」

そうだった。まだ使い魔としての契約を結んでいないんだった。

「なんだか良くわからないけれど、貴方達は使い魔として召喚されたんだもの。

私の使い魔になって貰うわよ」

「ふん、勝手に呼び出しておいて……」

それに私は呼び出された訳では無い、自らこの場所に赴いたのだ。お前が呼び出したのはこの子の方だ」

猫は腕に抱く少年を示した。

「……………」
（に、に、人間ですって！？ 嘘よ！？ いや、待て、良く考えるのよルイズッ！ あの猫の寵愛を受けている位だもの、何かあるんだわきつと……）

そう、そうよ、私のファーストキスの相手になる訳だものッ！
多分、何処かのスクウェアクラスのメイジに違いないわ。
それに……私が初めて自分で呼び出したんだもの……）

「わ、わかったわ。私はその子を呼び出したって訳なんでしょ。
ち、ちよつと貸しなさい。」

少女は眠る少年と契約する決意を固めた。

「無駄だ、人間の娘。この子は長い眠りに就いている。
魔法などでは目を覚まさんよ」

少女の決意が固まった事を感じた猫が突き放すように口を開いた。
猫は意固地として少年を離したくは無いようだ。

（長い眠りですって？ 私がわざわざキ、キスしてあげるんだから目を覚まさすに決まってるじゃないッ）

だが、例え幾千の言葉を並べても今の少女には意味を持たないようだ。

「なによ、やってみなきゃ分からないじゃないの。ほら、貸しなさい。」

「む、止める、手荒に扱うな」
猫の抵抗も虚しく、少年は少女の腕の中に抱き寄せられた。

猫の腕の中から奪った少年は以外と身長が高かった。

丸くなっていた時には子供のように思えたので驚きだったが、何よりも驚きだったのはその体だった。

腕の筋肉や、胸元から覗く胸板など、少年には不相応に感じられた程だ。

そして、筋肉の為かその体は異様な重さだった。

(メイジじゃないの?)

少女は不安を覚えたが、今さら止める訳にはいかなかった。抱きつく様な形になっていいる少年を無理矢理引き離し、誇らしげな表情で眠る少年の顔を両手で挟む。

そして一瞬の間を置くと、少年の唇と自らの唇を触れ合わせた。

「……………終わったわ」

「成る程、そうであった。

契約事には接吻であったな。」

成る程成る程と呟いた猫。

既視感を覚えた猫は愉快そうに笑った。

「ねえ、一つ聞きたいんだけど、あの子何者なの？ メイジ？」

「あの子はニンゲンだ……………」

私達にとって何処にでも存在する人間だ」

「……………」

な、なああんですってええ！？ ただの人間？ メイジじゃないのぉ！？」

素直にも少女は含みを持った猫の呟きに気付かなかった。

そして、素直な発言故に再び猫に溜め息を尽かせた。

「そうか、少しはお前の気分が分かった気がするぞ。希望の。

それにしても人間の娘、何故そう驚く。誰が見ても人間だろうに。」

「その辺で出会えばそう思うでしょうねッ！

だけど、貴方みたいなのに抱かれていればね、誰もそうは思わないわよッ！」

少女は余程ショックだったらしく顔を赤くして叫んだ。

「さっずがーゼロのルイズ！ まさか平民を呼び出したなんて本っ当前代未聞だよ！ 流石過ぎるよルイズ！」

「へ、平民が最もお似合いなメイジって、わ、笑わせ無いでくれよルイズ」

今まで固唾を飲んで様子を伺っていた生徒達が一斉に笑いだした。高位の精霊を呼び出しかの様に見えたルイズ、普段の彼女を知っている生徒達は信じられない思いだった。

だが、召喚されたのは平民。
やはりルイズだ。と何処か安心した様子で生徒達は笑い続けたのだった。

少女は絶望していた。

少年は平民だった。それは詰まり、少女に最も相応しい使い魔は平民。

という事だった。

期待を持って臨んだサモン・サーバントだが結局、自分はゼロなんだと思い知らされただけに終わった。

悔しかった。

周囲が笑う事が許せなかった。

だが、何よりもロクに魔法も使えない自分が憎かった。

悔しさで、ふがいなさで、涙が溢れた。

しかし、気丈にも少女は涙を悟らせはしないようにマントの袖を握り、頭を垂れた。

猫、ダンダイラムは驚愕して目の前の光景を見ていた。

接吻を終えた後、少年　ロディ・ラグナイト　の左手甲に何か文字が刻まれ始めたのだ。

これが契約か。と彼は興味を引かれ、その様子を観察していた。

そして、全ての文字が刻まれた時、ロディの指が反応を示したのを確かに目にした。

(まさかッ！)

目の錯覚かと思い、何度も目を擦り確かめる。

しかし、その度にピクリと反応する指や次第に震え始まる瞼を目にし、現実だと知らされた。

（ 何故、何故、目覚めるのが今なんだッ？）
ダンダイラムの驚愕を他所にロデイは瞼を開いた。

良く分からないが、僕は眠っていたようだ。

朦朧とする頭に響く誰かの声に起こされたようだ。

その声は未だ世界を認識出来ない頭にやけに鮮明に響いた。
だが、その声からは胸が苦しくなる程の悲しみが流れてくる。

（誰かが泣いている？）

徐々に意識が浮かび上がる。

寝ている訳にはいきそうになかった。

上げそうになる泣き声を必死で抑えていた私の隣に誰かが寄って来た。

（慰めなんていらぬのに……）

私はコルベール先生が慰めに来たと思った。

“いい人”として有名な先生だが、私はその中途半端が余り好きではなかった。

だが、近寄って来たは良いが何も話さない。
分かっていた。

掛ける言葉が見つからない、恐らくそうなんだろう。

（ 何がしたいのッ？）

私は睨むように顔を上げた。

「貴方……」

そこにはコルベール先生ではなく、先程私が呼び出した少年が居た。

少年は私に笑い掛けると頭を撫で始めた。

（ ななな、なにしてるのよ？）

子供扱いされた事に戸惑いはあった。
だが、頭を撫でられるという行為が心地良かった為に言葉に出来なかった。

「ははっ、見るよルイズが平民に頭撫でられてるよ！」

暫く頭を撫でていたロディだが、周りのソーサラーのような格好をした少年達からの言葉に手を止めた。

どうやら少女の名前はルイズというらしい。

“ルイズ”が誰かなんて、状況と少女から流れてくる感情から推測出来た。

どうやらこの少女が笑われているらしい。

とりあえず、ロディは頭を撫で続ける事にした。

ひたすらに少女を慰めるロディ。

「全く、気分はどうだ？寝坊助」

すると、誰かに呼び掛けられた。

注意して辺りを見回す、人、猫、人、人。

まるで周囲の人間の一人かのように猫が紛れていた。

「首を傾げるでない。まだ眠っているのか？ ニンゲンの戦士よ」

（その独特の言い回し……）

ッ！ ダンダイラムッ!?)

「気づくのが些か遅いぞ」

それは時を司るガーディアン、ダンダイラムだった。

ロディは珍しい事もあるものだと言った。

普段は永久機関から離れようとしないうダンダイラムである。
人に混じる姿などそうは見れない。

（そつえばダンダイラムと僕は何故ここに居るのだろうか？）

と言っか……。 「……どう……？」

口を開いたロディは一瞬、誰の声か気づけなかった。

老婆の様に枯れた声。

長い間眠っていた皺寄せである。

「私にも分かんよ。だが、私が存在しているのだ、ファルガイアには違いない。」

ファルガイアには違いないとは言え、ロディにはこの様な場所を知らなかった。

山は木々に覆われ、大地には緑が満ちている。

辺りの空気は澄み、芳醇な草の匂いがする。

まるで星の持つ力が伝わって来るかの様だ。

荒野のファルガイアしか知らないロディには、何もかもが新鮮で、初めての体験だった。

「……いつまでそうしてんのよッ！」

拳動不審に辺りを見回しながらも頭を撫で続ける少年に、少女は食って掛かった。

どうやら自らの置かれている状況を思い出したようだった。

(平民に頭を撫でられるなんて……)

少女は複雑な心境でロディを見上げた。

硬質そうな青色の髪。

見たこともない素材の赤いベスト。

同じく良く分らないタイツのようなもの。

腰に下げられた厚いベルト。

そして、胸元から覗く淡い光を放つペンダント。

異様尽くしの出で立ち。

「……ミスタ・コルベールッ！ 私はこれを使い魔にしなければいけないのですか!？」

良く考えるとこの異様な平民を使い魔として呼び出してしまった訳だった。

「ミス・ヴァリエール、貴女が好むと好まざるとに関わらず、彼は貴女の使い魔に決まったのです」

コルベール先生は眉を上げて諭してきた。

「やっぱりだめか……」

「だから、何を落胆しておる」

ルイズと呼ばれる少女が落ち込んでいると、猫が話し掛けてきた。
(そういえば猫の存在を忘れていたわ)

「ねえ、貴方とコイツってどんな関係なの？」

先程まで頭を撫でていた少年を指差し、問いかけた。

もしかしてこの猫は少年の使い魔か何かなのでは？

と思ったからだ。

「そうだな、ニンゲンの言葉で“戦友”とでも言った所か。」

「戦友？ 何よそれ。」

…… ってそれじゃあ貴方なんで此処にいるのよッ！？

ただの通りすがりじゃないッ」

「ふむ、言い得て妙だな。通りすがりとは」

「……………」

言葉もなかった。

「む……………」

いきなり思案を始めた猫は少年へ向き直った。

「ロデイ、残念だが私はそろそろ機関へ戻らねばならない。

まだ、色々と話さなければいけない事もあるのだが、時間だ。

これから君は沢山の問題に直面すると思うが、困った時は私の名
を呼べ。

今のファルガイアには力が満ちている。

君の声なら直ぐ様風が運び届けよう」

猫は微笑みながら良く分からない事を言う。

「それではまた会おう」

少年が頷いたのを確認すると猫は何の音も立てずにその場から消
え去ったのだった。

「……………」

展開についていけないでいた周囲も、私も、暫く驚きで目を開い

ていた。

「……さあ、皆さん次の授業に遅れてしまいます。早く戻りましょう。」

コルベール先生が沈黙を破る。

すると生徒達も平静を取り戻し始めたのが徐々に塔へと戻って行った。

しかも。

「あの猫、もったいなかったなーゼロのルイズ！ お前は平民と一緒に来いよ」

私への嫌味を言いながら。

結局、魔法の使えない私達はヴェストリの広場に取り残された。

私は渋々とだが、コイツを使い魔として認める事にした。

何かあれば先程の猫を呼び出せば良いと気付いたからだ。

使い魔として認めたのだ名前を聞いておく事にした。

「ああーもう。しょうがないわねッ！ アンタツ名前はッ？」

「ロディ…ラ、ラグナイト」

私の使い魔は皺枯れた声で答えた。

「ロディね分かったわ。」

私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

いい？ 私の事はぜええつたいに、ご主人様と呼びなさいッ！」

第二話

先程まで何だかんだ叫んでいたルイズが幾分肩を落とし歩いている。

その後方で彼方此方を見回しながらロデイが歩く。

次の授業の為に教室に向かって歩いていく所だった。

フラフラとした今にも躓きそうな足取りで歩いていたロデイだったが、不図、自らが向かっていた先を今更ながらに眺めると、足を止めて目を見開いた。

思わず零れそうになった声を呑み込み、目線を徐々に上げていく。塔と呼ぶには不釣り合いな迄の大きさ、城かと思過う様な敵かな佇まい、それらは図らずしもロデイに感嘆の呟きを漏らさせた。

しかし、ロデイは違う意味でも驚いていた。

（こんな立派な建物アーデルハイド城以外見たこと無いよッ！）

立ち止まり目を輝かせ頻りに頷くロデイ。

その姿は先を歩いていた少女に堪らなく写った。

存外に背が低く幼さが覗くロデイだが、その雰囲気は幼い顔立ちに反して千軍万馬のそれである。

そんな中、今ように時折見せる年相応の仕草は嘗て、セシリア達を魅了した様に魅力的だった。

だがしかし、鬼の様な形相でロデイに詰め寄る少女には魅力は通じ無かったらしい。

「ちよつと、ちゃんと着いて来なさいよッ！」

ルイズとしてみれば、平民の使い魔が塔に向かって頻りに頷いている姿など、ドラゴンが自分の翼を喰い千切って遊んでいるよりも質が悪かった。

恐らく先程のサモン・サーバントを多くの生徒が覗いていたのだろう、遠目からでも平民を指差し笑う姿が伺えた。

主人であるルイズのトリステイン魔法学院内での威厳を落とし、自

分は嘲笑を受けているとも露知らず、平民はルイズに気づくと申し訳なさそうに頭を下げ頬を一掻きした。

「はああ、なんでこんなの召喚しちゃったのよ……せめてあの猫が……」

何故か声が上手く出せない平民に、これから私の独り言が増えてゆく一方な気がした。

その後の授業も予想通りに進んだ。

サモン・サーバントの後の授業は互いの使い魔を披露する目的もあり、使い魔を連れて受ける事になっていた。

平民の使い魔を後ろに控えさせた私に生徒は勿論、教師からも嫌味としか思えない言葉を吐かれつつ、ノートに使いもしない魔法の定理を書き写す。

その繰り返し返し。

唯一予想外だったのは、平民が嫌味を吐かれる私を庇う様な行動をした事位である。

その時、私の胸に暖かい物が浮かんた。

理想としていた使い魔の在り方の一つを満たせるのではないかと思っただからだ。

しかし、部屋に戻って来た先程から胸元の宝石を取り出して眺め続ける平民の姿に不安になる。

彼の事は良く分からないがこれだけは確実に言える。

(……ぼけぼけし過ぎよッ)

授業も終わり、ルイズの部屋に連れて来られたロディは自分の胸元から覗く光に気がついた。

初めは首を傾げていたロディだが、それを胸元から取り出し眺めると、瞬きすら忘れ、今日何度目かの驚愕に目を見開いた。

非常に見慣れた淡い光。

セシリアがいつも大切にしていたそれである。

見間違える筈など無かった。

「…み…だの…かけ…ら？」

驚きの余り思わず呟いてしまった。

だが、その呟きは途切れ途切れにしか音にならない。

ロディは再び首を傾けた。

（そついえば声もちゃんと出ないし、此処が何処かも分からないし、体も節々痛いし……）

今まで気が付かなかったが、分からない事だらけだった。

とりあえず『何故なみだのかけらが僕の首にあるか』この問題から先に片付ける事にした。

暫く平民を放置していた私だったが、このまま放つて置けば朝まで眺めているかも知れないと思いを掛けた。

「ねえ、平民に宝石なんて嬉しいのも分かるけど、何時まで眺めてるつもりよ？」

平民の持つ宝石は柔らかな優しい光を湛えている。

確かに眺めていたいのも分かるが、流石に朝まで眺めていられても困る。

（それにしても、私でさえ本当に宝石かと疑ってしまいそうな位綺麗ね……）

「アナタ、どうしてそんな高そうな宝石持つてるのよ？」

平民は首を傾けた。

「何よそれ、アナタの物じゃないならなんで持つてるのよ？」

私の呆れた様子が伝ったのか平民は必死で手を横に振る。

「何を否定したって無駄。結局分からず終いよッ。」

……分からないなら昼間の猫にでも聞いてみればいいじゃない？」

唯一状況を理解していた節のあるあの猫なら分かるかもしれない。それに私も聞いてみたい事がある。

成る程と手を打ったロディは、あ…あ…と声を出し、大きく息を吸った。

「…ン…ラム…ダン…ダイラムッ！」

無理矢理に搾り出された声は叫びには程遠く、儀式を行う様子もない。

ただ、皺枯れた声で呼ぶだけだった。

ルイズは本当にあの猫が来るのかと怪訝に思った。

「本当にそんなん…」

ルイズが口を開いた瞬間、彼女の髪が靡いた。

正に瞬き一つ。

気が付くと目の前にあの猫が浮かんでいた。

(いつの間にツ!? いや、今現れたに違いないのだけど)

「叫ばなくても聞こえる。言っただろうロディ? 風は喜んで君の声を運んでくれたよ。」

それで、どうしたのだ?

驚きに固まるルイズを他所に、ダンダイラムは労る様な声音でロディに語り掛けた。

ロディは先ず『何故なみだのかけらが僕の首にあるか』という疑問を、掌に乗るなみだのかけらを示すことでダンダイラムに問い正した。

「ふむ、そうだな。巫女からの餞別と言った所だ。」

「せん…べつ?」

「そう餞別だ。君は気付いていないかも知れないが、君は長い間眠っていたのだよ。」

なみだのかけらは長い眠りに就いた君へ巫女からの餞別だ。

他のニンゲンからも餞別を預かってはいるが、此処が何処が分からない限りは取りに行くことは無理だろうが」

「みんなは?」

「……長い間眠っていたと言っただろう?」

君が知るニンゲンはもう残ってはいない」

流石にシヨックだった。

ロディの感覚ではつい最近まで共に過ごした大切な人達。

しかし、既に居なくなっただけという。

なみだのかけらから溢れる暖かい光が仲間達からの慰めを感じる。

「フフツ、そんな顔をするな。」

大丈夫だ、君には私が着いている。

何も心配いらな

「……………」

今まで蚊帳の外に追いやられていたルイズだが、妙な沈黙の間を縫ってここぞとばかりに手を挙げた。

「猫、貴方なんでそこまでこの平民を気に掛けるの？」

今日一日過ごして分かったけど、本当に何も無いじゃないコイツ

（もしかすると呆けている仕草がツボなのかも）

失礼ながらそんな事を思うルイズ。

「………… 本当はただのニンゲンだと思っかね？」

まあ、長い間共に過ごして来たのだ。情が移るのも不思議ではないと思うが

「貴方雄でしょッ!? 意味分からないッ！」

実にたわいない理由だ。

ルイズは溜め息を付いた。

（どうやら、私はゼロのままらしい。いや、猫を加味すると0、5と言った所か。

まあいいわ、猫は呼べば何時でも現れる様だし）

「はあ、何か疲れちゃった、もう寝るわ」

今日一日でルイズの心には棚どころか、引き出し迄作られた。

第二話（後書き）

召喚時のステータス

ロディ・ラグナイト

LV1

ガンウエリアー（使い魔）

ディフェンシブ

オリジナル

?????

フォース

?????

?????

?????

?????

装備

R・hand なし

L・hand なし

Body ブレイバーベスト

Head なし

Guard なし

LUCK

BAD

持ち物

なみだのかげら × 1

× 1

小さな花 × 5

1ギルコイン × 1

わすれじのペン × 1

第三話

ルイズが眠りに就いた後、ダンダイラムに大体の説明をしてもらった。

……余り関係の無い話も多々あったが。ダンダイラムには時間の感覚が無く、更に永久機関に引き込まれていたらしく、余り外界の話は分からないらしい。

それでも断片的な話を纏めると戦争が何度かあったらしい。恐らく人同士の争いであつたとの事だ。

その他、ガーディアンは信仰心により姿を変えられる事や、今のダンダイラムは僕に分かりやすいように昔の形を取っている事を話してくれた。

性別の話は正直どちらでも構わないが、信仰心の話は女神として慕われるラフティーナを思い出し、成る程と思つた。

(それにしても何故人間同士で争いが起こつたんだろう?)

「他にも色々と説明しなければならぬ事は有るが、余りにも多いのでな、分からない事があつたらその都度呼んでくれ。」

ダンダイラムは絶対不変の時を司るだけあつて非常にマイペースなガーディアンだつた。

ルイズに召喚された翌朝、ロディは非常に困つていた。

ルイズから着替えを頼まれたロディだが、女性の服に触れた事も数える程しかないロディである。

着替えさせる事など到底無理だつた。

それに、裸に近いルイズを見てから顔の火照りが止まらなかつた。

「こんのおボケ平民ツ！ 何処行くのよッ！」　ロディは訳の分からない感情に恐怖し、背中にルイズの罵声を浴びながらロディは階段を降りて行つた。

階段を降り、広場に着く頃にはロデイも落ち着きを取り戻していた。
急いだ為に少し息が荒くなっていたが二、三度の深呼吸で平常に戻った。

(それにしても驚いたなあ)

冷静になったロデイは今朝の出来事を思い返した。
椅子に座って眠っていたロデイはいきなりの衝撃で目を覚ました。
モンスターによる不意打ちかと思い、慌てて飛び退くと周囲を見回す。

手は無意識に腰に下がるベルトに回っていた。

「朝から何してんのアンタ……?」

しかし、返って来たのは呆れた声だった。

ロデイはルイズによって蹴り起こされたらしい。

寝惚けていたが、昨日良く分からない場所に召喚された事を思い出した。

「ん、とりあえず着替えさせて。

服はその引き出しに入ってる」

そう言われ、引き出しを開けたロデイは固まった。

その後、良く分からずに逃げて来てしまったという訳だ。

(……良く考えると僕って恥ずかしい……?)

そつだよツ！ 以前にもジェーンに言われた事があつたじゃないかツ！

なのにツ……)

ロデイは頭を抱えて悶えた。

悶えていたロデイだったが、不図、何かの気配を感じ近くの草影に身を密めた。自分が降りて来た出口と反対側の方向から何か近づいて来ている。

明らかに人の気配では無い。

それは塔の影から徐々に姿を現した。

「もぐらツ……?」

それはモグラだった。

しかし、通常の大きさでは無く、正にモンスターと言える大きさのモグラだった。

そのモグラはロディに気が付かず、何かにじやれついている様だった。

愛嬌があるその様子にロディは肩の力を抜いて、草影から出た。

「もんもん…もんもん…」

目の前を通り過ぎて行くモグラを眺めていると今度は目玉が現れた。

驚いたロディだったが、昨日自分と同じ様に召喚されたモンスター達だと気が付いた。

ロディは目玉を撫でてやる。

目玉は嬉しそうに一鳴きすると何処かへと飛んで行った。

（凄いッ！ モンスターと人が同じ場所で過ごせるなんてッ！）

興奮を隠せないロディはモグラの向かった方向へと足取りを弾ませて向かった。

ルイズは不機嫌だった。

朝、着替えを頼むと何故か逃げて行った使い魔を始めとして、ツエルプストーに因縁をつけられ、使い魔が居ないままの食事を馬鹿にされて。

朝食が終わり、紅茶を飲んでいる時にモグラを追いかける使い魔を目撃して。

ルイズは絶望した。

「あんのおボケ使い魔あッ

もう知らないんだからッ！

……ん？」

怒り心頭だったルイズだが、不図、ロディが召喚されてから何も食べていない事に気が付いた。

それは正に天恵であった。

「飢えてるからって、人の使い魔食べようとしてるんじゃないわよッ！」

そしてここに使い魔を追いかける使い魔を更に追いかける主人。という奇妙な構図が完成した。

何とか使い魔を捕獲し、使い魔の何足るかを教え込んでいたルイズだったが、周りが騒がしい事に気が付いた。

「ねえ、何の騒ぎ？」

近くの男子生徒に事情を尋ねるとグラモンの馬鹿息子に平民のメイドが粗相をしたらしい。

遠くから泣きながら謝罪をする女の声と屁理屈を言い女性に当たる男の声が聞こえて来る。

「全く」

(ギーシュの自己顕示欲も少しはどうかにならないかしら)

ルイズは平民を連れて騒ぎの輪に近づく。

すると、ひたすらに頭を下げるメイドと特に変わった所もないギーシュが目に入ってきた。

(一体何があったの?)

粗相をした。との事なので、お茶でも掛けられたのかと思っただがどうやら違うらしい。

その理由は直ぐに知ることが出来た。

周りから飛ぶ野次が『二股』、『香水』などの単語を口々に放っていたからである。

「……あつきた。

そんな理由でメイドに当たってるんじゃないわよ。

平民ッ！ 部屋に帰ってさっきの続きするわよッ！」

余りに呆れた為、部屋に戻ろうとしたルイズだが、平民が居ない事に気が付いた。

辺りを見回してたルイズの耳にギーシュの声が響く。

「何だね君はッ!？」

ああーそうか、昨日ゼロのルイズが呼び出した平民か。
見て分かるだろう？

今礼儀を知らないメイドに礼儀を教えてやっている途中なんだ。
邪魔をしないでくれないかッ！」

ルイズは背中に冷たい汗が流れるのを確かに感じた。

ロディは少年に向かって謝る少女に何処か懐かしさを感じてた。
だからだろうか、事情も呑み込めないままに少女を庇ってしまった
のは。

だが、明らかに一方的に攻められる少女を見てはいらなかった。
目の前で睨んでいる薔薇を持った少年が礼儀がどうと言っていたが、
礼儀に疎い僕でも分かる。

王族であったセシリア達を見ていたがそんな礼儀有る筈がない。

僕は目の前の少年を睨み返した。

「へえ、随分と挑発的じゃないか平民。」

貴族に逆らうとどうなるか知らない訳じゃないだろう？」

「ッ！ いけませんッ！」

私なんかお気になさらずに、今すぐミスタ・グラモンに御謝りに
なつて下さいッ！」

少女が泣きながら止めてくるが、引く訳にはいかない。

それに先程感じた懐かしさの正体が分かったのだ。

少女は似ていた。

ファルガイアでは少ない黒髪や目元などエマ博士にそっくりだ。

そんな少女を見放せる筈ない。

「ボクも嘗められたものだなッ！
平民ッ！」

先ずはお前から礼儀を教えてやるッ！」

……決闘だッ！ 今すぐヴェストリの広場に来いッ！」

「うおおおおッ！ いいぞーギーシュ！」

「男を見せてくれー」

ギーシュの宣言に広場に歓声が上がった。

「ちょっと、アンタ何勝手に喧嘩してるのよッ!? 貴族と決闘だなんて怪我じゃ済まないわよッ!」

すると、ルイズが沸き立つ周囲を縫って慌てて近づいて来た。

(怪我じゃ済まない、か)

そういえばハンペンからも言われた。

だから、返答も既に決まってる。

(心配してくれてありがとう。)

だけどもごめんね、僕の返事は前から決まってる)

「……ッ? 本当に……死んじゃっても知らないんだからッ!」
顔を赤くしたルイズは行ってしまった。

「あ……ど、どうしてッ!?

貴族と決闘だなんて、貴方が殺されてしまいますッ!」

少女は肩を抱いて震えていた。

僕は安心して欲しくて頭を撫でた。

「……ごめんなさい」

少女は鬱向いたまま何処かへ駆けて行ってしまった。

「ハハハッ、格好付けようとして逃げられてやんの。流石ルイズの使い魔だあ」

周りからはそう見えたのだろうか?

というより、誰も助けようとしなかったのだろうか?

「ハンッ、そんな目をしていられるのも今の内だ。さっさとやられちまえよッ。」

ほれ、ヴェストリの広場は向こうだ」

人同士の戦争が起きたのも無理ない事なのかも知れない。

ヴェストリの広場には既に大勢の生徒が集まっていた。

貴族間の決闘は禁止とされているため、生徒としてみれば滅多に無い大きなイベントだった。

ロデイが広場に着くと、揚々とした少年の口上が聞こえて来た。既に少年は勝った気でいるらしい。

ロデイも幾ら徒手空拳だとしても早々と負ける気はしない。

「逃げずに来たことは誉めてやるッ。

フツ、なんだ武器も持っていないとは、死にに来たのか君は？」

少年はロデイを鼻で笑うと薔薇を一つ投げて寄越した。

その薔薇はなんと、地面に落ちると一振りの剣と化した。

「ボクの圧勝じゃつまらないからね、君はソレを使えばいい」

ロデイは幸いと剣に手を掛けた。

すると、何処かへ行ってしまった筈のルイズが声を張り上げ叫んだ。

「ダメよッ！ 絶対抜いちゃダメッ！

武器なんか使えばアナタ本当に殺されるわッ！」

ロデイが振り向くと其処にはルイズとルイズに連れられたメイドの少女が居た。

やはり、心配してくれているらしい。

ロデイは微笑みを二人に向けてと徐ろに剣を引き抜いた。

「ロデイッ!?」

ルイズの悲鳴が響く。

だがしかし、ロデイの耳には聞こえていなかった。

ロデイは剣を引き抜いた瞬間から体に力が満ち、心が締め付けられる様な感情を感じていた。

一瞬訝かしんだが、何処か慣れた感覚に身を任せた。

「どうやらそちらの準備は出来た様だね。

……ワルキューレッ！」

少年は何か呟くと薔薇を振るった。

薔薇の花弁が宙に散りばめられた次の瞬間、その花弁が光輝やいた。光が収まった其処には薔薇の代わりに騎士風の重厚な造りの鎧が数体佇んでいた。

どうやらこれが魔法らしい。

「行けッ！ ワルキューレッ！」

少年が命じるとワルキューレと呼ばれた鎧が一体ロディに向かつて来た。

宙に浮きながら向かって来る鎧は重厚さとは裏腹に、素早い動きを見せる。

左右に揺れフェイントを掛けつつロディへ向かい拳を振るってくる。だが、不思議と力が沸いてくるロディは軽々と拳を避ける。

重く風を切る音が耳元で聞こえるが、気にならなかった。

やはり相手は鎧であり、拳を振るう瞬間は動きが鈍るのだ。見切るのには簡単だった。

猛攻を凌いでいるロディが意外だったのか、少年は驚いた表情で薔薇を振るった。

鎧は攻撃が止め、元の位置に戻る。

「避けるだけじゃ勝負は勝てないッ！ これでどうだッ！」

少年は鎧を二体差し向けて来た。

だが、ロディも防戦一方な訳ではない。

ロディは拳を避けている最中に気付いた事があった。

何故か動きが普段よりも素早く、頭に刀の使い方や知識が流れ込んで来るのだ。

先程は混乱してしまい、反撃が出来なかった。

次は此方の番だった。

二体の鎧が交互に揺れつつ、近づいて来る。

すると急に二体の動きが真逆の動きに変わった。

バラバラの動きでロディに近づくと同時に拳を振るって来る。

「……ッ！」

以前のロディだったら防ぐしかなかっただろう。

だが、ロディは後方へ飛び退く事で避ける。

そして、剣を上段に構えると一足で鎧の懐に飛び込む。

一閃。

二体の鎧は揃って上半身を斬り飛ばされ沈黙した。
早打ち、ソニックバスター。

剣速を高め刃の煌めきと共に衝撃波を放つ、ザックが得意とした早打ちだった。

「なッ!? ……成る程、少しはやるようだね。だが、そろそろ終わりにさせて貰おうッ。

行けッ!」

少年は残る六体もの鎧を差し向けた。

剣を腰溜めに構えるロディへと、まるで幾何学模様を描くかの様に近づく鎧達。

「ち、ちよつと止めてッ! 止めなさいッ!」

流石にルイズが止めに入ろうとする。

少年はルイズの叫びを無視し薔薇を振るった。

だがしかし、鎧達はロディへ拳を振るう前に沈黙することになる。

「……ハッ!」

ロディは烈迫の気合いと共に踏み込んだ。

高い金属音。

「……嘘」

それは誰の呟きだろうか。

いつの間にか鎧達は全て斬り裂かれ、ロディは少年へと剣を向けていたのだ。

「あ、あ!? ……ボ、ボクの負けだ」

静まり返る広場に少年の敗北を認める声が響いた。

第四話

ヴェストリの広場は静まり返っていた。

平民が貴族を打ち負かす。

その事実は謂わばタブーであり、貴族を至上とする世界の根底を覆すものだった。

誰しも困惑気な表情を隠せない。

中には涙を浮かべている者もいた。

そんな身動き一つでさえ嫌う様な雰囲気の中、ロデイと決闘を行った少年が口を開いた。

「…お、お願いだ、降参するから剣を降ろしてくれ」

少年は先程から鋒を向けられたままだった。

「…お、おいッ！ 剣を降ろせッ平民ッ！」

プライドか功名心からかは分からないが、周囲の誰かが声を上げる。

「そ、そうだ！ 止めてやれ」

「酷い……」

一人を皮切りに生徒達が騒ぎ出す。

彼等は理性の範疇を超えた出来事に恐怖を感じたのだった。

まるでロデイを糾弾しているかの様な周囲にルイズは憤慨した。

「ちよつとッ何で私の平民がそんなに言われなきゃいけないのよッ！？」

どう考えても悪いのはギーシュでしょうがッ！

魔法が使えなくても貴族でなくとも、それが人を判断する基準ではないことをルイズは誰よりも知っていた。

それでも声は止まない。

「人を……貴方達の安い価値観で測られて堪えるものですかッ！

ロデイッ！ 行くわよッ！」

結局は自分がゼロでなくなると、ロデイの様に罵倒されるのだらう。

(盲目もいいところ、どこまで愚鈍なのかしら)

ルイズにはこれ以上ロデイを晒し者にするつもりは無かった。

「ほら！ 行きましよう？」

しかし、ルイズの呼び掛けにロデイは応じない。

ルイズは怪訝に思いロデイの顔を覗き込んだ。

ロデイは瞬きもせず、ギーシュに鋒を向けた先程の体勢で固まっていた。

その姿は螺が切れた人形を彷彿とさせた。

明らかに尋常ではない様子にルイズは蒼白になる。

「ね、ねえ、ロデイ？ 何してるのよ……ねえ……ねえッ！」

何度もロデイの名を呼んだ。

それでも、ロデイの瞳は中空を睨む。

既に剣は薔薇の花弁となり散ってしまったが、掌は未だに握り締められている。

ルイズは自分ではどうにも出来ない事を悟った。

「誰かツ水のメイジは居ないのッ！」

これだけの生徒が集まっているのだ。治療の魔法を使える者が居る筈だ。

だが、ルイズの様子から事態を察する事が出来たであろう生徒達は、身動きをするばかりで一向に名乗りが上がらなかった。

ルイズは鬱向き、唇を噛み締めた。

余りの力に肉が裂け、血が滲む。

今程に魔法を使えない事を恨めしく思った事はなかった。

「もういい……貴方達を頼った私が間違いだっただわ」

鬱向いたままルイズはロデイの側に寄り、背中に背負おうとする。

しかし、意外に重く、上手く背負う事が出来ない。

腕を抱え必死にロデイの重さに耐えるが、膝を付きそうになる。

涙が零れそうになるルイズ、だが、急にロデイが軽くなった。

「私に御手伝いさせて下さい。ミス・ヴァリエール」
先程のメイドの少女がロディの右肩を背負った為にルイズの負担が減ったのだった。

「……急いで医務室まで運ぶわよ」
二人はロディを抱えて生徒達の前から去って行った。

急いでロディを医者への心得がある教師に診て貰った所、何も分からないとの事だった。

心臓も正常に機能しているし、何処にも異常が見られない、と。
結局、手の施しようが分からないらしい。

ルイズは教師からの説明を受けると、直ぐ様学院の書庫へと走った。

そこは膨大な数の書物を納めている。何か手掛かりが有るかも知れない。

廊下を駆け抜け、階段を二段飛ばしに駆け上がる。

（それにしても朝とは偉い変わり様よね私）

ルイズは走りながらもロディに対する態度が柔らかくなった原因を思い返した。

先程行われた決闘の時である。

ワルキューレによる一斉攻撃がロディに届こうかという瞬間、ルイズの頭に様々な情景が浮かんで来たのだ。

それは

何処か辺境の村で大勢の人に石を投げられていたり、街が焼けている中、冷たくなっていく少年を抱え佇んでいたりと様々だ。
しかし、全てが霞んで良く見えなかった。

そんな中、霞もせず鮮明に浮かんだ情景があった。
そこは酒場らしき場所で、どうやらテーブルを囲んでいるらしいかった。

対面の女性が見慣れない食べ者を何皿も積み上げている。

右に座る男性が肩に乗る奇妙な生き物と共に、対面の女性を笑っている。

左の女性はこちらを向いて微笑んでいる。

その後ろでは執事風の男性が滂沱の涙を流している。

全員が楽し気に騒いでいる。

視点の持ち主の幸せそうな感情も伝わって来た。

そして、左に座っていた女性が急に顔を近づけてきた光景を最後に、意識が暗転していった。

薄れる意識の中でルイズは不図、対面に座る女性が見覚えの有る寶石を飾っている事に気付いた。

ルイズはこれがロディの記憶だと思った。

そして気付いた。

ロディにはロディの生活が有った事。

猫も言っていたが、無理矢理に呼び出してしまったという事を。

そして意識が戻り、目を瞬かせるといつの間にかに全てのワルキユーレが倒されており、ギーシュが敗北を宣言していた。

その後は無我夢中で今に至るまで先程の情景を思う暇が無かった。

(……もし、平民が目覚ましたら少しだけ誉めてあげよう)

心細いだろうロディに少しは優しくしようと思った。

そして、書庫まで辿り着いたルイズは、山と積まれた書物の前で一つ頷くと書物との格闘を始めた。

長く本の虫と化しているルイズだったが、目的の書物は未だ見つからず、徐々に苛々が募っていた。

「御主、ロディに何をした？」

そんな時に誰かに話掛けられた為、思わず振り返り睨みつけてしまった。

「煩いッ！ 私は……って猫ッ!？」

そこには呼ばれていない筈のダンダイラムが宙に浮かんでいた。

「暇なのでロディの様子を見に来てみれば……」

説明して貰おうか、ニンゲン？」

「なんで気が付かなかったのかしら……　　そうよ、貴方が居たじやないッ！」

「早く説明しろ、ニンゲン。私も怒るぞ。」

「猫ッ！　ちよつと聞きたいんだけど………」

「成る程、そういう事か。誰かと争いをしたのは確かだな？」

「ええ、確かよ。その後、あんな状態になってしまったの」

「ARMを使った形跡もない、殴り合い程度の争いなら暫く眠れば目が覚めるだろう」

「そういう事なら私は帰る。また来るぞ。」

ダンダイラムは一人納得すると帰ってしまった。

残されたルイズは、何処か常識外れな猫を信じられず、秘薬を取り寄せる事にした。

ロデイは体中に痛みを覚え、目を開けた。

同じ様な感覚を最近も感じた気がしたが、体の痛みと空腹の為、考える事を放棄した。

「ああッ！　御目覚めになられたのですねッ！　よかったあ………」
扉を開けて入って来た女の子は何故かエマ博士に似ていた。

やはり、同じ様な感覚を覚えた為にロデイは首を傾けた。

「あ、ごめんなさいなさい。申し遅れました。私はシエスタと言います。この間は助けて頂きありがとうございますッ！」

言われて思い出した。

金髪の少年に虐めを受けていたメイドの少女だ。

「あの時は失礼な事を言ってしまうすみません。御礼と言っては

………」

甲斐々しく世話を焼こうとする少女を他所にロデイは再び思案気な顔をした。

（最近忘れっぽい……もしかしてこれがザックの言っていた成長期！？）

未だ寝惚けた頭のロディは自らの発想に慌てて、ベストから押し花を取り出し一つキスをしたのだった。

第四話（後書き）

ステータス

ロディ・ラグナイト

LV5

ガンウォリアー（使い魔）

ディフェンシブ

オリジナル

?????

フォース

アクセラレイター

?????

?????

?????

使用後数日の眠りを必要とする。

装備

R・hand なし

L・hand なし

Body ブレイバーベスト

Head なし

Guard なし

LUCK

NORMAL

持ち物

なみだのかけら × 1

小さな花 × 5

1ギルコイン × 1

わすれじのペン × 1

第五話（前書き）

無限連結機関 無限連環永久機関。と訂正しました。

第五話

コルベールは先程から書物と睨み合いを続けていた。

彼は先日行われたサモン・サーバントにて気になる事があった。

それはヴァリエール家三女が喚び出した使い魔に刻まれた刻印だった。

見慣れないそれに何故か違和感を覚えた。

思わず書き留めてしまいこうして書物を開いているのだった。

既に三刻もの間、手掛かりが掴む事が出来なかった。

意地になった彼は更に書物を取り寄せ開く。

すると、気になる一節を目にした。

それは始祖の書と呼ばれている古く、分厚い文献の中にあつた。

次第に鼻息を荒くし、食い入る様に読み耽るコルベール。

「これは、これは大きな発見かも知れませぬぞおおッ！」

椅子が倒れるのに構わず勢いよく立ち上がる。

彼は叫びを上げ何処かへ走り出したのだった。

ロディは眠っていた間に溜まっていた衣服を洗濯に来ていた。

目を覚ましたロディは主人から大量の衣服を手渡され

「アンタに取って置いて上げたの。感謝しなさいッ」

という有難い言葉を頂き、今に至るのだった。

桶に水を溜め石鹸を泡立て、洗濯をしようと思つたロディだったが、不図、首を傾けた。

薄いのだ。服の素材が。

ロディは身を守る為に頑丈な素材で出来た服しか見た事が無かつた。

恐々とその三角の見慣れない布を伸ばし、伸縮性を確認する。

「……………」

存外に伸びた。

ロディは一つ頷くと

(知らぬが仏?)

など思い衣服を洗濯し始めた。

トリスティン魔法学院に通う生徒達にとって、朝食は一つの楽しみであり、一日の始まりを告げる物でもあった。

賑やかな食堂に続々と生徒達が集まる。

眠た気な顔で目を擦りつつ、自分の席へと着いて行く。

向かい合う生徒とたわいもない会話を楽しんだり、机に突伏したり。太古から脈々と受け継がれる光景である。

だが、普段は穏やかな雰囲気にも包まれているであろう食堂の一角に、奇妙な光景が広がっていた。

その光景に一同は目を見開いた。

何人もの生徒が痛い位に目を擦り出す。

其処には、昨日ルイズが呼び出した平民と、同じく平民と共に現れた猫が席に着いていた。

「一度味わってみたいと思っていた、感謝するぞロディ」

猫が平民に話掛けると平民は照れた様に頬を掻いた。

生徒達の間には奇妙な沈黙が降りる。

機嫌良さ気に微笑む高位の精霊と思われる猫と決闘後の出来事に、声を掛ける事が出来ない。

すると、食堂の扉が轟音を立て開かれた。

「ちよつとつと待てええッ！」

食堂にルイズの叫びが響き渡る。

扉を開らき、佇むルイズは鬼の様に平民と猫を睨むと、淑女にあるまじき足取りで歩み寄った。

「こんのおホモ猫ッ、私に何をしたのよッ!？」

「何を? …… ああ、時を止めたただけだ。」

それと、私は雄ではないと幾ら言えば分かる」

「……時を止めたですって? そんな話信じる訳無いでしょうが

ッ！」

始まりは洗濯を終えたロデイが衣服をルイズに手渡した時だった。「あら？ 早かったのね？」

使い魔の仕事振りに驚くルイズ。

これは褒めてやる必要がありそうね。

と満足気に頷くルイズだったが、籠から覗く一つの布に眉が逆立った。

「へへ平民、こここの、パパ、パンツは何かしら？」

ルイズは籠を奪うと衣服を確かめた。

「あら、これは何かしら、これも何かしら。このおパンツだった物は何かしらああ!？」

呆けた使い魔を正座させ、使い魔の何足るかを再び説き始めたルイズ。

だが、巻くし立てられる言葉にロデイは首を傾けてしまった。

「そう分かった。……直接、体に教えてあげるわッ！」

足蹴にされルイズの下で悶えるロデイ。

「ロデイが嫌がっているではないか、今すぐ足を退けた方が良いでしょう？ ニンゲン」

更に間の悪い事にダンダイラムが顔を出した。

普段なら頼りになるガーディアンだが、今だけは出てきて欲しくはない。

とロデイは足蹴にされつつ思った。

「出たわね……このアホ猫ッ！ いいから黙ってなさいッ！」

「苦しそうに……見ているロデイ、こんな口汚いニンゲンなど捻ってやるからな。」

「なんですって？ 誰が口汚い人間だつて言うのよッ！」

何とも幼稚な喧嘩はシエスタが朝食を知らせに来るまで続いた。

それを聞いたダンダイラムが時を止め、今の内にと食堂へやって来たのであった。

「はあ、もういいわ、朝食は静かに食べましょう。」
「やつと過ぎ去った嵐に生徒達は歓喜した。」

「今朝は大変でしたね。厨房の方にも聞こえて来ましたよ」
広場に座り込んでいたロデイに苦笑いを浮かべたシエスタが声を掛けて来た。

ロデイは疲れた様子で頷く。

実は、収まりを見せたルイズとダンダイラムだが、ロデイに用意された食事の事で再び喧嘩を始めてしまったのだった。

お陰で元々少ない朝食を殆ど食べられなかった。

「時々見かけますが、先程ミス・ヴァリエールと言い合いをしていた猫の御方はどんな人何です？」

そう聞かれ、ロデイは誰もダンダイラムに大した反応をしなかった事に気が付いた。

(もしかして、ガーディアンを知らない?)

「……すみません、変な事を聞いてしまいましたね。」

首を傾げ思案をするロデイに何かを感じたのかシエスタは謝った。

「……！」

堪ったものじゃないとロデイは思いきり首を振る。

「ふふ、今、変な事想像しましたね？大丈夫ですよ。猫の御方と

ロデイさんが特別な仲だなんて思っていますから。」

(思ってるじゃないか)

ロデイは目を細め懐疑的な眼差しを向けた。

「あ、いつけない。忘れていました。マルトー、マルトーと言うコック長から誘われていたんですが一度厨房へ行ってみませんか？マルトーさんがご馳走を用意するって意気込んでましたよ」

そんなロデイの様子に気付かずシエスタは此処に来た目的を思い出した。

腹の空いていたロデイは渡りに船のこの提案に激しく頷いた。

厨房へと足を運んだロデイだが、各々の仕事振りに驚いていた。野菜を刻んだり、スープの味見をしていたり、一見簡単に思えるその作業を各々が真剣に、一つの妥協も許さないと言わんばかりに続けている。

「……少し遅かったみたいですね。もう少しで一段落するので待っていて貰っても大丈夫ですか？」

申し訳なさそうな表情でシエスタは尋ねてきた。

ロデイが断る訳も無く、一心に作業する彼等を暫く眺めていた。

ロデイは誇らしくも見えるその姿を羨ましく思った。彼等に比べて自分は何をしているのだろうか。

やるべき仕事も録にこなせず、誰かに迷惑を掛けて。結局、争う事しか出来ない。

平和な世界に自分の様な物はいらないのだろう。

「どうかしましたか？」

顔に出ていたのだろう、シエスタに心配を掛けてしまった様だ。

ロデイはなんでもないと頭を振って微笑み返した。

「おう、来てたかシエスタ、待たせた様だな。何だ？ 今日とは男連れか？」

一段落着いたのだろう、恰幅の良い男が口元を歪めて近づいて来た。

「そうなんです……って違います！ 此方がロデイさんです！

折角お越し頂いたんですから」

「何ッ！？ ってえと、我らの剣？」

「ロデイさんです。変な名前を着けないで下さいね」

「そうか……お前さんが……お前らあ！ 例の物を我らの剣に用意して差し上げるおッ！」

「「ハイッ！」」

マルトーが叫ぶと数人が厨房の奥へ戻って行った。すると、食欲をそそる匂いが漂って来る。

グウ。思わずロデイの腹が鳴ってしまった。

「ハハハッ、そうさ！ 我らの剣の為にちよつとした料理を用意してある。」

「「召し上がって下さい。我らの剣！」」

用意された食事は貴族のソレに見劣りしない出来だった。

ロデイはこの待遇に首を傾けた。

（何故こんな良くしてくれるのだろうか？）

「遠慮なんてするな、我らの剣。お前さんは俺達平民の希望なんだ。」

貴族に一泡吹かせる事が出来てすつきりしたぜ」

マルトーは男らしい笑みを浮かべ、ロデイの背中を叩く。

戸惑いながらロデイはスープを口に運んだ。

清風名月。

穏やかな風が流れ、柔らかな月明かりが広場を照らす。

マルトーなどに引き留められ、結局、一日御世話になってしまった。

「今日はありがとうございました。マルトーさんもとっても喜んでましたよ。」

二人並んで月を眺めていると、シエスタに頭を下げられた。

こちらこそとロデイも頭を下げ返す。

ロデイは誰かに認められた事が嬉しかった。

例え貴族と平民の確執から出た言葉だとしても、認められた覚えが少ないロデイの心に響いた。

見ず知らずの人達と笑い合える。

案外、ニンゲンの心は豊かなままなのかも知れない。

「そろそろ私も戻りますね。……あの、もし宜しければ又、厨房に入らしてはくれませんか？」

賄いになっちゃいますが、何時でもご馳走します」

一礼をしたシエスタは塔へと戻って行った。ロデイは暫く寄り添う二つの月をただ眺めていた。

旧き月は迷いを抱くロデイの道標になるのであろうか？
今は只、朧銀の輝きを湛えるだけである。

第六話

ルイズ直々に覚え込まされた洗濯をこなし、部屋に戻って来たロデイ。

だが、部屋の中には平穏な朝に関わらず、ヒリ付いた空気が流れていた。

最近ルイズは度々キュルケに因縁を付けられている様なので、いつもの事かとロデイは気にせず、部屋の掃除を始めた。

だが、本日も主人の怒りの矛先は使い魔へと向けられた。

「遅いわよッ平民ッ！……行くわよ、今すぐ街へ出掛けるわよッ！」

ルイズは雑巾を絞るロデイの首元を掴むと、部屋の外へと引きずって行った。

部屋の扉が乱雑に開かれた。

無礼に当たる行為だが部屋の主である蒼い髪の少女は気にも止めず、手に持つ書物を捲る。

「ねえ、ねえタバサ聞いて！ あのヴァリエールが街へ出掛けたらしいのよ！」

サモン・サーバントが一応と言え成功したからって色気付いちゃって。

ツエルプストーとしてどうしても許せないのは……」

一息で捲し立てる紅髪の少女。

だが、蒼い髪の少女はまるで聞こえていないのか再びページを捲る。紅髪の少女も次第に息が切れてくる。

その姿を目の端に止めると蒼い髪の少女は自分に掛けたサイレントを解いた。

「だからお願いッ、助けてタバサッ！」

良く分からないが親友の助けを無視出来ない。

蒼い髪の少女、タバサはにべもなく頷いた。

初めての乗馬に四苦八苦しながらも道中を進むルイズとロディ。随分と街道も整えられているので、休憩も無く進む事が出来ている。

「それにしても良い天気ねえ、やっぱり出掛けて正解だったわね。動機は不純だけど……」

ルイズも言った通り今日は雲も少なく、快晴が広がっていた。豊かな星の匂いを感じる事が出来る素晴らしい日和だった。

ロディも思わず惚けてしまっていた。

「あ　　ッ！　グロウアップルウー！」

並んで惚けていた二人だったが、不図、ルイズが空を指差し叫んだ。

見ると服を着た風船の様な何が浮かんでいた。

（　　モンスターッ!?）

ロディはルイズを乗せた馬の前に降りて身構える。

「クル？」

所が、モンスターは首を傾げるだけで襲う素振りを見せない。

「何してるのよッ!?　早くッ！　早くアイツを捕まえてッ！」

「……は？」

ルイズの言葉が信じられず、思わず声を漏らしてしまった。

（捕まえるって言っても……）

「クルクルクルクル」

戸惑っている間にモンスターがロディに近づいて来た。

取り敢えず捕まえてみる。

「やあ　たああ！　平民ッ褒めて使わすッ！」

「……クル？」

殆ど警戒心も持たずに近づいて来るモンスターを初めて見る。

こんなのを捕まえてどうするのだろうか？

「それにしてもグロウアップルが逃げないなんて珍しいわね？」

まあ良いつか。ソイツを寄越しなさい平民」

言われるままにモンスターをルイズに渡す。

嬉しそうに受け取ったルイズだったが、直ぐに表情を改める。

目を閉じて心を静めるとモンスターを足蹴にし、無表情に手を振り上げた。

「てええりやああ！」

ペチ。

叫び声に反し力の抜ける音を出しながら、ルイズはモンスターを叩いた。

未だ理解出来ないルイズの言動に首を傾げるロディだったが、次の瞬間、驚愕に目を見開いた。

なんとモンスターが徐々に消え出したのだ。

モンスターを倒すには程遠い力で叩かれたにも関わらず、だ。

ロディは目を覚ましてから驚きの連続だった。

「……………やった、ついにやった。私もこれで魔法が使える……………」
ルイズに理由を聞こうとすると虚ろに呟く彼女が目に入った。

恐々とルイズの肩を揺する。

「何よ？ ……そうね、貴方、実験台になりなさい」
ルイズは何かを閃いた様だ。

嫌な予感を覚え、逃げ出そうとしたがもう遅い。

肩を固く掴まれ、逃げられない。

「それじゃ、行くわよ…………… レビテーションッ！」
当たりに閃光が走った。

「グロウアップルを倒したのに魔法が使えないなんて…………… 絶望だわ……………」

でも、アナタよく無事だったわね？」

結局ルイズの魔法は失敗に終わった。

ロディに掛けられたレビテーションだったが何故か爆発を起こした。

ロディはプレイヤーベストを着ていた為に怪我は無かった。

だが、ロディはすっかり怯えていた。
街に入った今もルイズの後方を歩いている。

「本当に悪いと思ってるわ。だからいい加減に警戒を解いてくれないかしら？」

「……」

ロディは渋々とルイズに並んだ。

「それにしても今日は活気が有るわね？ スリには気をつけるのよ」

と言われてもロディは財布を持ってはいない。

そのまま大通りを歩いているとルイズが声を上げた。

「あつた、此处ね。」

見ると甲冑の飾られた大きな店が門を開いていた。

思わず歩みより、材質を確かめる。

「何してるの？ コツチよ」

「は？」

ロディが振り向くと向かいの細い路地の入口にルイズが佇んでいた。
た。

どうやらこの店ではないらしい。

ルイズと共に裏路地に入り、少し歩いた所に剣と盾のレリーフを掲げる店が見えて来た。

古呆けたレリーフと影に覆われる店の雰囲気は何とも怪しげである。

ロディは首を傾けた。

「し、しょうがないじゃない、アンタに使った秘薬のお陰で余り手持ちが無いのよッ！」

成る程、とロディは手を打った。

シエスタからロディが以前倒れた時に、ルイズが高い薬を取り寄せたと聞いていた。

自分の為なのだ、何故文句が言えるだろう。

ロディは微笑むとルイズを追い抜き店に入った。

店の中は外装とは違い、本格的な品揃えをしていた。店に入り一番に目に付く、カウンターのの上に堂々と飾られる槍。初めに槍を見せるとは、珍しい事である。

壁には各々種類別に武器が飾られている。凝った趣きの物も見受けられ、壮観であった。

興味を引かれ、飾られている斧を手に取る。

分厚い刃に見合う重量にロディは体勢を崩しそうになる。

「おっと、お兄さん落とさないで下さいよ。」

「こちら商売なんでねえ。」

何故か鼻を赤く染めた店主に釘を刺された。

「ねえ、この人に見合う剣を出してくれない？」

「分かりやした。……っと、コイツはどうでしょう？ 中々の業物ですよ。」

店主はカウンターの下に潜ると細長い小剣を取り出した。

「んー、ダメね。この前のヤツより大分小さいもの。もっと大きいのは無いの？」

「と言われましても、彼方のお兄さんには丁度良いのではないかと」

「うっさいわね。あるんでしょ？ もっと大きいのが」

「……わかりやした。少しお待ちを」

結局店主が折れたよう店で店の奥に入っていった。

「も、しかして、僕、に？」

先程の会話を聞いていたロディは思った。

「そうよ、この前みたく何か有ったら大変なもの。 ツエルプス

トーに襲われた時にも使えるし……」

高い薬を取り寄せただけでは無く、剣まで貰えると言っただ。

ロディは感激した。

感激の余り主人の頭を撫でてしまう程に。

「成る程、最近の貴族様は平民とよろしくやっってるんですねえ。」

羨ましい限りで」

タイミング悪く店主が戻って来た。

「な、何してんのよッ！ 店主……良い？ そんな言ってる
店ごと吹き飛ばすわよ？」

ルイズはロデイの腹に拳を御見舞いすると、店主に向かいドスの
効いた声で話し掛けた。

「す、すいやせん…。ところでコイツなんかはどうでしょう？」
恐縮する店主は大振りの剣を持っていた。

「ふーむ、ま、良さそうね」

だが、ロデイから見れば、煌びやかに飾られたその剣は明らかに
実用的ではなかった。

試しにルイズの手から奪い、一つ振ってみる。

(軽い……)

その剣は余りに軽く、芯が弱い。

「高いわよッ！ もう少し安くならないの？」

「いえ、此方としてもギリギリの値段でして……」

どうやらルイズはこの剣に決めた様だった。

だが、明らかに店主に騙されている。

ロデイはルイズを押し退け店主に向かい剣の柄を突き出した。

「……どうしたの？」

ルイズが怪訝な表情で聞いて来る。

「騙され、ちゃ、ダメだよ」

「……ちよつとそれ本当なの？」

「だ、騙しているなんて滅相も無い。貴族様、言い掛かりですよ。
剣も録に使いなさそうな奴に分かる訳ありません」

それでも言い募る店主をロデイは睨み付けた。

「本当の样ね。御生憎だけど、ロデイはね、見事に剣を扱えるの
よ。要らないわソレ」

「……そうですか、残念です」

流石に分が悪くなった店主は引き下がった。

その後、自らの目で確かめる為に店内を見回るロディ。

儀式用の物や装飾用の物が多く、実用的な物が中々見つからなかった。

だが、諦め欠けていたその時。

ロディは何かに惹かれる様に、店の片隅に無造作に積まれる剣の山へと足を進めた。

(声が聞こえた)

ロディは大量に積まれた剣の山を掻き分けると、一振りの剣を手にとった。

「ちよつと、其処には良い剣なんて無いわよ!？」

しかし、既にルイズの声も聞こえない程にロディは剣に見入っていた。

ロディはその剣を知っていた。

ブラックフェンリル。

“剣”のエルミナ・ニエツトを筆頭に、フェンリル・ナイトの幻影がザックに託した剣である。

錆び付いてはいるが、見間違える事は無い。

泣きながらこの剣を抱くザックの姿が深く脳裏に焼き付いている為に。

「ルイズ、これ……」

「ん、何よ？ そんなボロい剣が良いの？ もっと良いものだって有るわよ!？」

ルイズが驚いているが既に心は決まっている。

ロディは他の剣などに興味が無かった。

確かに錆び付いてはいるが直ぐに輝きを取り戻すだろう。

剣に込められた想いが、魂が違う。

エルミナ、レノックス、強いてはフェンリルナイトからザックへ。ザックからロディへ。

何とも奇妙な巡り合わせである。

「……分かったわ。店主、この剣を買っわ。安くしなさいよ？」
意思が固まったロディを悟り、ルイズも折れる。

「あゝらミス・ヴァリエール、貴方、使い魔にそんなボロい剣を買って上げるなんて流石ね」

突然響いた声に振り返ると、何時の間にか店の入口にはキュルケとタバサが佇んでいた。

「何よツ、使い魔がコレが良いって言うんですもの。しょうがないじゃない」

「大方、貴方の懐具合でも気にしてるんじゃないのおゝ？」

「クツ、そんな訳無いじゃない。ロディ、このボロ剣が良いのよねえ？」

(また始まった……)

ロディはここ数日で見慣れた光景に、タバサと顔を合わせ頬を掻いた。

ロディはその夜、月の見えない広場にブラックフェンリルを担ぎ佇んでいた。

結局ロディはブラックフェンリルを選び、帰って来たのだった。剣を広場に突き刺すとロディは一人剣に向かい眩きだした。

「起きたら何だか大変だよ、ザック。皆は居ないし、分からない事だらけで……」

でも、取り敢えず頑張ってみるよ。

争う事しか出来なくても、誰かを守れるのなら。だから、皆でちゃんと見ていてよ」

強く風が広場へ吹き寄せる。

「ロディッ!? 何処に行ったのよッ？」

どうやら主人が御呼びの様だ。

「……そっちに行くまで頑張るよ」

ロディは空を見上げ眩くと、刺さっている剣を抜き塔へと戻って行った。

人影の無い広場に再び強く風が吹いた。

その風は空へと、ロディの眩きを乗せて天へと昇っていったのだ
った。

第六話（後書き）

文才が欲しくて堪らない…

プロローグ 2 - 1 (前書き)

こんなサブタイトルなのは、文才が無く難産過ぎるのがいけないと思います。

プロローグ 2 - 1

最近、ロデイには新たな日課が出来た。主人であるルイズが学業に励んでいる間に愛剣ブラクフェンリルの錆を落とす事だった。街に買い物へと出掛けた日から十日が経っている。

その翌朝から続いている日課だが、長い年月を経て赤茶に染まった刀身は未だに本来の輝きを取り戻していなかった。

ロデイとしても刀身に魔法が掛けられているのかと疑いたくなくなって来る。

だが、鞘に納める事が出来ずにいた十日前よりは進歩しただろう。

「ふう……」

ロデイは一つ息を吐いた。

額に光る汗を拭くと、空を見上げた。既に太陽は中天を過ぎていた。いつの間にか、大分時間が経っていたようだ。

（そういえばシエスタに厨房に呼ばれてたっけ）

「……………」

悩んだロデイだったが、一つ頷くと砥石を布で覆い、剣を鞘に納め、赤色のバンダナで締め上げた。

終いの様だが、厨房に向かうにはまだ早い。

ロデイは近くの木に寄り掛かり、手足を伸ばし、伸びをした。

目を閉じ、暫く自然に身を預けるこの行為もやはり日課になりつつある。

ロデイはこの時間が堪らなく好きだった。

この学院に吹く風はまるで命の息吹であった、澄んだ空気の中に精霊達の気配を感じる。

肌を撫でる大地の御腕。

優しい風は木々を揺らし、北へと去って行く。

トリステイン。

この国の名前だという。

聞いた事の無い名前であり、建国された時期も知らない。
だが、恐らく彼等の誰かが建国に大きな力になったに違いない。
溢れる緑に守護獣の気配。

「ふふ」

ロディは笑みを抑える事が出来なかった。

既に太陽は傾き、黄昏が辺りを淡く染め上げている。

木漏れ日が揺れ、鞘に巻かれたバンダナも日の光を浴びてその赤を
朱に写し、靡く。

「……ロディさん、寝ちゃったんですね」

シエスタが木に寄り掛かり眠っているロディに近づいて来た。

「もう、大事そうに剣を抱えて……最近ロディさんったらこの
剣にお熱過ぎです」

シエスタは眉間に皺を寄せるとロディの頬を突きだした。

「折角、ケーキ作ったのに……力作だったのに、貴族の方に御
出しする時より頑張ったのに、何回もマルトーさんに冷やかされた
のに……」

「むぐう」

「ッ！ いっけない、赤くなっちゃうかも」

いつの間にか自分の世界に籠ってしまったシエスタは少々強く突
いてしまった様だ。

シエスタはとりあえず頬を何度も撫で始めた。

妙な温もりにロディは目を覚ました。

すると何故かシエスタが頬を撫でている。

何度も何度も撫でるシエスタにロディは首を傾けた。

「あはは……おはようございます」

「おはようございます」

とりあえず挨拶を返したロディだが、違和感を覚えた。

（おはよう？）

「ッ！」

ロディはすっかり傾いた太陽に驚くと共に用事をすっぱかしてしまつた事に気が付いた。

「ごめん」

「そんなツ、私、全然気にしてませんッ。」

「……それに私こそ謝る必要があります」

「でも、ごめん」

「うう、私の馬鹿……。 こういう御人でしたなのに。ま、まあお互い様ですよロディさんッ！」

それよりも、今から厨房へ入らしてくれませんか？」

断る訳も無くロディは頷いた。

ロディは何故か、ここ数日同じ会話を交わしている気がしたが頭を振って立ち上がった。

実は十一日連続の記録である。

最近、ルイズは金欠気味であつた。

先日の買い物もそうだが、ロディが倒れた時に取り寄せた秘薬の代金が大きかつた。

仕送り迄、半月もある。

「むうー。不味いわ、このままだと舞踏会のドレスが買えないわ」
春に行われる舞踏会が今月の終わりに予定されている為、生徒達は躍起となり自慢の一張羅を仕立てている。

一応ルイズも用意はしてはいるが、気に入らないのだ。

開いた胸元を始めとし、男性に目眩を起こさせる様な大胆なドレス。元々姉の御下がりなのだが、余り豊かとは言えない体のルイズには似合わなかつた。

「もしあのドレスを着てもしたら、何を言われるか分かつたもんじゃないわ……。 特にツエルプストーなんかに」

思わず想像してしまつたルイズは悔しそうに唇を噛んだ。

「はあ、それにしてもドレスが高すぎるのよね。まったく商人も良くやるわ」

「……こうなったら使い魔を働かせるしかない様ね」
ルイズは何を思い着いたのか口元を歪め始めた。

厨房にてシエスタ特製ケーキとマルトーの料理を味わい、お腹を満たしたロディはルイズの元に向かっていた。
足取り軽く、にやけた顔で廊下を進むロディ。

先程のケーキや料理を思い出すとどうしようもなく顔が緩んでしま
う。

特に今日はシエスタのケーキが格別だった。

早い内に食べていればどれ程の味だったか、想像に固くない。

(また作ってくれるなんて……)

廊下で雑談に興じる生徒達に怪訝な目を向けられるがロディの目には写らなかつたらしい。

そのままロディは微笑みながら主人の部屋の扉を開いた。

「ただいま」

「あら、お帰りなさい。今日も朝から何処かへフラフラ行きやがりまして、疲れたでしょう?」

だが、部屋に佇むルイズの姿に笑みを浮かべていた頬は引き吊つた。

ロディは知っていた。

この状態のルイズが良からぬ事をしでかす事を。

「はは、ただいま」

「ふふ、ねえ、平民? 貴方は私の使い魔よね? 私はご主人様よね?」

「う、うん」

「よかったわ。否定でもされたらどうしようかと思っていたの」
「……………」

「明日は街へ行こうと思うの。ねえ、平民、私は今余りお金が無いの。だから…… 貴方が変わりに働くのよッ! いいわねッ!」

「は、はいッ」

無理難題と言つ訳でも無く少し安心したロデイだった。

プロローグ2・ラスト

一面鈍色に覆われた空。

昨日迄の晴天とは打って変わり、先程覗いていた晴れ間も今にも降りだしそうな曇天に移り変わっていた。

「あ、雨、降らなきゃいいけど」

これでは折角、咲いた花も散ってしまう。

と、馬上で揺られるルイズが呟いた。

「……………」

空を見上げコクリと頷くロディ。

その時、遠くの空で閃光が流星の様に走るのを見た。

「……………花なんて気にしてる場合じゃ無いわね。もう少しだから急ぐわよ」

再びロディは頷くとルイズを引き寄せ、手綱を握った。

「き、貴族と同じ馬に乗れるだなんて光栄に思いなさいッ！ それに、私を落としてもしたら承知しないんだからッ！」

実は今回、節約の為に馬を一頭のみ借り、二人で同じ馬に乗っていた。

身長の低いルイズはどうしてもロディに覆われる様な形になる。

その為にルイズは学院を出てから今まで文句を垂れ流しているのだった。

此処数日でルイズに慣れきったロディは、微笑みながら手綱を操り街へと向かった。

街へ向かうロディ達の背後、遠くの空に閃光が走る。すると、どういう事だろうか。

閃光はいつになっても消える事無く、流星の様に雲の上へと消えて行ったのだった。

トリスティン首都、王都トリスタリア。

山を背にし高い外壁を持つトリスタニアは国の政治、商業の中心であり、一日に何千の人々が行き交っている。

そんなトリスタニアは大まかに外側と内側の二つに別れている。

外側は旅人向けの店が並び、一貫して騒がしい程の賑わいを見せる。大通りには様々な商店が並び、鎬を削り合う。

客寄せが声を上げると向かいの店も負けじと声を張り上げる。

食品から、武器、防具、マジックアイテム、装飾品、果ては良く分からない品まで見受けられる。

そして、大通りから路地を抜けると歓楽街が広がる。

胸元をはだけた女性が覚束ない足取りの酔っ払いに品を作る。

顔を綻ばせ大きな袋を抱えた男性が賭博から出てくる。

開店前の劇場の前では踊り子が華麗な踊りを披露する。

宿屋なども其処かしこに点在している。

中には表では扱えなさそうな怪しげな店がひっそりと門を構える。

内側では賑やかな外側とは変わり、静かで穏やかな空気が流れている。

主に王宮に勤める人々の為の建物が並んでいる。

王立図書館、練兵所、寮などである

此処まで来ると王都の象徴たる、白亜の城を間近で眺める事が出来る。

城下を俯瞰する城は日を浴びる事で白亜の輝きを更に強める。

その光景を目にした人々は驚嘆の声を上げずにはいられない。

それはロディ達にも言えた。

「なんでッ? どうしてッ? どうして雨が降らないのッ!?

早めに備えていればイイ気になって。

只でさえお金がないのにいい」

先程からベッドの上で嘆いているルイズ。

ロディはどうして良いか分からずに頬を掻いてた。

二人はトリスタニアに着いて直ぐに宿を取った。

流石に雨の中ロデイを働かせる訳にはいかず、学院に戻ろうにも雷雨が心配な為に戻れない。

よって、今日は明日晴れる事を願いつつ疲れを癒す事になったのだった。

その際に城を目にした二人だったが、翳ってしまった白亜の輝き故か感慨も無く目を反らし、宿へと急いだ。

しかし、宿に入るも一向に雷は鳴らず、雨も降らない。無駄に休みをとってしまった、稼ぐ筈だったお金も無い。

そうしてルイズが嘆き始め今に至る。

「ああ、始祖よ。どうか、どうか明日は晴れます様、お願いいたします」

遂には祈り始めたルイズ。

そんな中ロデイは不図した疑問に首を傾けた。

それは先程、道中で見た稲光の事だった。

明らかに雲は王都の方向へと流れており、既に雨や雷が鳴っているも可笑しくは無かった。

長く渡り鳥として各地を旅して来たロデイはある程度なら天候も読める。

（マズいなあ、判断が鈍ってるかも）

傾けた首を直し、一つ頷く。

ロデイは恐らく自分の読み違いだと思い、ブラックフェンリルの鎧を落とし始めた。

天候が変わってもメイドの仕事が変わる訳でも無く、シエスタは黙々と洗い物をこなしていた。

曇りの日となると貴族の大半は自室に戻っているか、ロビーにて友人と話をしているかである。

中には肌を重ね合っている男女も居るのかも知れない。

だが、貴族は身体も資本であり、婚約をしている者も居るため大半は上の二つに当てはまる。

その為、広場にはシエスタと他に数人のメイドしか見られなかった。
「ふう、こんな物でしょう。それにしても、もうすっかり水も暖かくなりましたね。苦しゅうない苦しゅうない！」

……なんちゃって」

貴族の真似であろうか？

声を低くし、眉を寄せて反り返る。

決して人が見ている所では行えない行為である。

平民としても、人としても。

「そのニンゲン、何をしている？」

「ひ、ひゃいッ！」

(み、見られちゃった!?)

誰かに見られていたとは思わず、顔まで赤くなったシエスタ。

「少し良いか？ ロデイと言うニンゲンを見なかったか？」

「は、はいッ！ ロデイさんでしたらミス・ヴァリエールと街へ行かれました。」

……あれ？猫さん？」

シエスタが振り返ってみるとそこには何時かルイズと罵詈雑言を言い合っていた猫が佇んでいた。

「ふむ、街とはな……。まあ良いか。所でニンゲン、いいか、私の名前はダンダイラムだ。決して猫などでは無いぞ」

「失礼しました。えっと、ダンさん？」

(……最近、ロデイさんといひ不思議な語感の方が多いですね)

「ニンゲンは変な呼称をするものだな。先程もロデイを探している最中にバケネコなどと呼ばれたよ」

「はは……」

まさか。

化け猫とは化けて出た猫、つまり貴方です。

とも言えず、曖昧に笑うしかないシエスタ。

「そういえば其奴、はくしゃくがどうとも言っていたな。最近の言葉に疎い私が古いのかも知れんが。全くわからんな」

「は、伯爵！？ ダンさん無視して来ちゃったんですか？」

「余りに執拗なものでな、巻いてきた」

シエスタは目眩がした。まさか伯爵の命を無視し、巻いてくるなど冗談であつて欲しかった。

「それにしてもロデイは出掛けたとはな、私はもう戻る。ロデイが戻ったら私が来たと伝えてくれ。それではな」

「分かりました。それで……………」

き、消えた！？」

唐突に消え去つたダンダイラムに再び目眩がしたシエスタだった。

眼下に覗く広場は今は閑散としており、遠くに見える筈の山々も今や雲に覆われ姿を隠している。

「モツド伯ですが、また、ですか？」

窓際でパイプを吹かすオスマンに書物を棚に戻しているロングビルが声を掛けた。

彼女は此処、学院長室に先程まで訪れていた貴族の事が気になり、オスマンに声を掛けた。

「うむ。わし達貴族が言うのもなんじゃが、平民を何だと思つてるんかのう」

「……………やはり」

「不幸中の幸いとも言えば良いのか、今回は一人で良いそうじゃ」

「ッ！」

ブチ、という聞こえない程小さな音が学院長室に響く。

ロングビルは血が滲む唇を噛み締め、オスマンを睨み付けた。

（……………成る程のう）

視線を感じたオスマンだが、何も言わず景色を眺め続けた。

プロローグ2・ラスト（後書き）

自分で言うのも何ですが、話数の表記をどうしようかと悩みます。とりあえず、プロローグ 本編。の流れで行こうかと。唐突に変わるかも知れませんが（^^；

第一話

ロデイ達が宿を取った翌朝。

前日の曇りが嘘の様な晴天の下、ロデイは客寄せに勤しんでいた。

「酒場…酒場だよ。」

魅惑の妖精亭。

何件か仕事を貰いに行った中で唯一、雇ってくれた場所である。

午前中から開いている酒場も珍しい。

そういう仕事だが、ノルマが設定されているにも関わらず、歩く人々は見向きもしない。

「魅惑の妖精亭、酒も料理も絶品だよー。」

ロデイは泣きそうだった。

それでも、与えられた仕事であり自分と主人の生活費を稼ぐ為である。ロデイは客寄せを続けるしか無かった。

「あんた声小さすぎ……」

ロデイが客寄せを続けていると、昼寝をしている筈のルイズに声を掛けられた。

だが、声が小さいと言われても、ロデイは余り大きな声が出せないでいた。

ロデイはルイズに分かって貰う為に喉を指差した。

「何よ？ ああ、そっか、喉ね……って、客寄せにならないじゃない、それ」

それでも主人と自分の生活の為にやるしかない。

「酒場だよー。料理も酒も絶品だよー」

その後もルイズが見守る中、暫く客寄せを続けるが、人々の見向きもしない。

「やっぱ止まらないわね。　って言うか文句がダメなんじゃないの？」

「ッー！」

気怠けにルイズが放った一言だったが、ロデイは閃いた。

(成る程ッ！ そういう事かッ！)

「コホン、……酒場だよー、料理も酒も絶品。女の子も絶品だよー」

するとどうだろうか。

今まで見向きもしなかった人々が足を止めたでは無いか。足を止めた中の一人がロデイへ近づいてくる。

ロデイは内心歓喜しつつ、爽やかな笑みを浮かべた。

「い、今女の子って言ったよね？ 言ったよね？」

しかし、近づいてきた男性は鼻息を荒くし、執拗に女の子、と言う所を強調してくる。

「は、はい。可愛い女の子が沢山居る、魅惑の妖精亭です」

一歩引きつつもアピールを忘れないロデイ。

「あ、ありがとうッ！ もーれっに感動したッ！ 今すぐ音速を超えてむかうぜッ」

返答を聞いた男性は音速とは思えない速度で酒場へと向かって行った。

「はッ、ちよろいわね」

貴族とは思えないルイズの言葉であるが、ロデイも同感であった。

その後も魔法の単語をふんだんに散りばめた客寄せで、順調にノルマを消化していった。

ルイズは次々と足を止める男達に、仕事はどうしたと呆れつつロデイの隣でジュースを飲んでいる。

余程暇なのか一時間もロデイに付き合っている。

「酒場だよー。女の子が沢山揃った酒場は如何だよー」

また一人、男性が足を止めた。

その男性はうつ向いている為に表情が分からない。

今までと同じく魔法の単語に釣られたのだろうとロデイは笑みを浮

かべた。

「おい……。そこのお前ッ！」

だが、どうやら違う様だ。

血走った目を此方へ向ける男性は友好的とは程遠く、今にも殴りかかって来そうである。

「お前だつて言つてんだろッ！ 其所の貴族ッ！」

客寄せへの文句かと思われたが、どうやらルイズに用があるらしい。

「え、な、何？ わ、私？」

怒鳴られたルイズは縮こまり、訳が分っていない様だった。

(……良く分からないけど)

主人を守る為、ロデイがルイズの前に立ち塞がった。

「何だガキがあッ！ 引ッ込んでろッ！」

俺は貴族に用があるんだッ！」

「うるさいわねッ！ いきなり何よ、街中で大声上げて。

恥ぢず

かしくないのかしら!？」

ロデイの影からルイズが顔を出す。

どうやらロデイが盾になった為、強気に戻った様だ。

ロデイとしてみれば迷惑な事である。

「クソッ！」

貴族がああッ！ぶち殺してやるッ！」

逆上した男は叫び声を上げながら向かって来る。

(……また余計な事を言つて……)

だが、呆れている場合ではない。

ロデイは身構える。

どうやら男は徒手空拳であり、刃物などは見当たらない。

だが、油断をするとルイズに危害が及ぶ可能性がある。

「そこをどけええッ！」

「退けるかッ！」

邪魔だとばかりに男が体当たりを仕掛けて来る。

ロディは腰を低く構えると男を受け止めた。

「離せッ！ 離せッ！」

俺は貴族をぶちのめすんだッ！」

「頭をッ、冷やせッ！」

ロディは抱えていた男を投げ飛ばした。男は地面に叩きつけられ、数回跳ねた後、ようやく止まった。

「あんた、いきなり貴族に殴りかかるなんて、殺されたいの？」

「うう、クソッ、クソオオ」

「はッ、いい様ね。安心するのね、殺しはしない……ってちょっと！ 何よ！？」

ロディは涙を流す男に興味を持った。

貴族のルイズに任せると事態が悪化すると感じ、直接話をする事にした。涙し、嗚咽をもらす男に近づくと、ロディは屈み込んだ。

「どうしてこんな事を？」

「チクシヨオ、チクシヨオ」

だが、男は話を聞く素振りを見せず、むせび泣いている。

ロディは男が落ち着くまで優しい声音で何度も話掛けた。

あの後、根気よく話掛け続けた結果、男はどうにか泣き止んだ。

「いきなり殴りかかるなんてどういう事よ？」

堪ったものじゃない、とルイズは訪ねた。

「……………」

だが、泣き止みはしたものの、貴族であるルイズの言葉には反応を返さないでいた。

「どうしましたか？」

「あんたは平民みたいだから話すよ……………」

だが、ロディの言葉に対しては反応を返すのだ。

ルイズは面白くなさそうにそっぽを向いたままだ。

男は弱々しい声音で語り始めた。

「先月、俺は結婚したんだ。長年思い続けた幼なじみと。だけど、先日、その女房が貴族に買われちまったんだッ。」

もちろん女房も俺も反対したさ……。

だが、相手は貴族だッ！俺に何が出来たッ！？俺が反抗すれば女房を殺すと脅され、女房が反抗すれば俺を殺すと脅される。

……結局、俺達のような平民には何も出来やしなかった。

その日から俺は貴族を憎んだ。そして今日、貴族を殺してやろうと街へ繰り出し、偶々見つけたお前さん達に襲い掛かり、返り討ちに合ったと言う訳だ……」

信じられない話だった。

(人を買う、だなんて)

ロディは衝撃を受けていた。

まさか確執が此処まで深いとは。

最早、確執なんて言葉で納める事は出来やしない。

「確かに、気分が悪くなる話ね。」

だけど、誰かは知らないけど、そういう貴族も居るんだもの仕方ないわよ」

「仕方ないだトッ！？ふざけるなッ！クソッ……」

ロディもルイズの言葉が信じられなかった。

あの貴族に誇りを持ち、貴族足ろうと努力を怠らないルイズが言うからには、そういう社会と言う事なのだ。

「なあ、兄さん。連れて行ったのはモッドって奴だ。」

お前も誰かを想っているなら、気を付けろよ？

モッドって貴族は俺の女房の他にも大勢の女を囲っているらしいからな……。」

「モッド！？ってモッド伯の事？

……成る程、納得出来るけど、伯爵とはね。お手上げよ。」

(モッド、か)

「奥さんの名前は？」

「そうだな……、マリアって言うんだ。
栗色の綺麗な髪をしてる。 とんでもない美人だったよ、俺にと
っては。」

もし、もし何処かでマリア会ったら、伝えてくれないか？

“いつまでも忘れはしない”と。

俺は会えそうにないんでね……」

「……分かった。」

ロディは絶対に伝えたい為に名前と言葉を胸に刻んだ。

「ッ!? わ、私が、ですか？」

緊張した面持ちシエスタが向かいに座るオスマンに問い返した。

「その通り。」

すまない、伯爵直々の申し出故に、断る訳には行かなかったのじ

ゃ

しかし、同じ答えが返って来る。

聞き間違いならどれ程良かったか。

シエスタは信じる事が出来なかった。

「そ、そんな、何で、どうして私なのですか？」

「……すまない」

オスマンがシエスタに向かい頭を下げる。

普段であれば恐縮の余りに、焦っているだろう光景。

だが、シエスタはただ、涙を流すだけであった。

気まずい雰囲気の中、ロディ達は学院に戻っていた。

あの後、賃金を受け取ると昼食も食べずに学院へ向かう事になった。

ロディは何故か学院が恋しく思えた。

二人はただ馬に揺られつつ進む。

そんな学院まで続くと思われた沈黙の中、ルイズが呟いた。

「……平民の貴方には悪いけど、アレが現実なのよ。

だけど、勘違いしないで。」

貴族が偉いと言われるのは、義務を果たしているからなの。
争いでまず先に犠牲になるのは私達貴族なのよ」

「……………」
貴族と平民。

異邦人とも言えるロデイには難しい問題かも知れない。

ロデイは何も言えずに頭を垂れた。

ロデイとしても貴族が皆、善人では無い事は分かる。

だが、納得することは出来なかつた。

様々な想いを抱えつつ進む二人。

学院までもうすぐである。

第一話（後書き）

妄想だけは爆発しているのですが、上手く文字にする事が出来ない。
と言いますか、技法も何もあつたもんじゃないです。

第二話（前書き）

遅れてしまいました（^ー^ ;）

第二話

「もんもん、もん」

先程からロデイは足元でミミズを食べるモグラを眺めていた。

実は、学院に戻ったロデイだったが、ルイズと一緒に部屋へと戻らず、広場の片隅で座り込んでいるのだった。

気まずさに耐えきれず、逃げて来てしまった。

平民と貴族。

街を出て以来その二つの言葉がロデイの頭を巡っていた。

それぞれを足らしめる違いがどうしても分からないでいた。

確かに貧富の差はどこにだって存在すると思うが、それ即ち格差と
いうのも違う気がするのだ。

絶対なる権威など存在してはいけない。

だが、貴族の中にもルイズのような気高い者も沢山居るのだろうし、
戦時などでは祖国を、平民を守る為に貴族が剣を取るという。

最早、ロデイには何が正しく、何が間違いなのかが分からなくなっ
て来ていた。

「……はあ、君は気楽そうが良いね」

「もんもん」

モグラは、無邪気にミミズを食い干切った。

「……ねえ、ダンダイラム」

「どうした？ 随分と浮かない顔をしているな」

「平民と貴族の違いってなんだろう」

ロデイは格差などと縁遠い守護獣の、長く人間を見てきた彼等の
意見が聞いてみたかった。

「知らんよ。だが、人間と魔族の様なものだとは思つがな」

「ッ！」

だが、想像を遥かに超えた言葉にロデイは目を開いた。

「何を驚く？ 存外に魔族の方がましかもしれんぞ、奴等の行動には一貫した理念が感じられた。まあ、迷惑差加減と憎さには天地の開きがあるがな。比べて、人間はどうだ？」

「……………」

確かにダンダイラムの言う通りかも知れない。

マザーを除いてだが、魔族は自分達の住処を探して星の海を渡り、そしてファルガイアに辿り着いた。

そして、ファルガイアに住む人間やエルウとファルガイアを巡る争いを始めた。

手段はどうあれ、彼等はファルガイアに住みたかったのだろう。

だが、今や原住民である人間達に滅ぼされてしまった。

「そんな単純なものではないがな、我等にとって奴等は純粹な悪には変わり無い」

「……………」

平民の望みは普通の生活。

だが、貴族は……

しかし、それも義務を果たした上なのだ。

何が正しく、何が間違いなのかが益々分からなくなっていく。

何故か無性に泣きたかった。

「すまん、例えが悪かったな。そんなに難しく考えないでくれ」

俯いてしまったロデイの頭を子供をあやすようにダンダイラムは撫で続けた。

シエスタは目を屢叩いた。

モッド伯の使用人に自室まで案内して貰ったシエスタだったが、自室の扉を開いたまま固まってしまった。

「あの〜、ここ本当に私の部屋でいいんですかあ？」

固まっていたシエスタは案内役の女性に思わず問い掛けた。

「ええ、今日からこの部屋は貴女の部屋となりました。自由に使

って下さい」

シエスタとしてみれば今までの自室は、弟妹やメイドと一緒に部屋であった為、誰かと相部屋という意識が強かった。

だが、扉を開けてみれば個室であり、ベッドにテーブルまで置いてある。

驚きの余りに言葉も無かったのだった。

「私、感動しちゃいました！」

「そう、良かったわこんな所でも喜んで貰えて……」

「うわあ〜テーブルもピカピカ、ベッドもふかふかですう。あ、綺麗なお花。こっちにも……」

「それでは、伯爵様がお戻りになられましたらお呼び致します。

それまでは自由にして下さって結構ですので」

「ッ！ ……わかりました」

その言葉にシエスタは表情を変化させた。

シエスタは大人しく荷物を取り出し始めた。

「また一人……」

退室した案内役の女性は、シエスタが居るであろう室内に悲し気な瞳を向けた。

第二話（後書き）

ということまで二二をお送りしました。

僕はなんとか今年を乗りきれそうです。

一時は首を押さえガクブルしてました。

次の話は早めに上げることが出来そうです。

第三話

宵闇の中、街を影が駆け抜ける。

新月の夜に混じり、闇を纏い誰の目にも留まることなく飛ぶように走る。

地理を把握しているのだろうか？

何度も後ろを振り返りはするのだが、躓くこともなく走る。数度振り返り、振り返ることを止めた影は、路地裏へと入った。

「ふう、撒いたか？」

何かの倉庫だろう建物物の物陰に隠れると、影は懐に手を伸ばした。取り出したのは、暗闇の中ですら輝く宝石。

見事なまでの技巧、精密過ぎる程の加工にて作り出される至高の宝石。

しかし、それ程の宝石を手に持つ影は、何故か溜め息を吐き、月の無い空を見上げる。

「これでいいんだよね？ 母さん……」

徐々に上達している洗濯の技術に一人頷く。

いくらルイズと気まずいとは言え、自分の仕事を投げ出す訳にはいかない。

最近では、ルイズに怒られはするが、服を破くことも無くなった。

これを進歩と言わずになんと言うのだろうか。

洗い終わったばかりの洗濯物の仕上がりに再び頷いた。

だが、女性の下着を薄笑いを浮かべながら眺める姿は、怪しいことこの上ない。

広場で仕事をしているメイド達も、遠巻きに見てみぬふりをしてい

る。「……随分とニヤけてやがるな」

しかし、そんなメイドも目を背けたがる光景に自ら加わる人物が現れた。

髭を生やした恰幅のいい男性。マルトーだ。

「……」

マルトーの声に周囲の様子に気がついた。

ロディはあらぬ疑いを掛けられる前に、弁解しようと思いはしたが、何も声にならない。

冷静に考えて、間違いなく自分は変人である。

つい自分で認めてしまい、言葉を失ってしまったのである。

「その様子だと、今まで気がつかないでいたのか？」

呆然とするロディにマルトーは理由を察する事が出来た。

慌てて口を何度も閉開させる平民の希望にマルトーは溜め息をつく。

「それにしても我らが希望、その下着は貴族の嬢ちゃんのか？」

マルトーはロディが手にする見たこともないような素材で装飾された下着が気になった。

貴族の下着というのは一枚で平民一月程の食費を賄える。

それに、平民では貴族の下着にお目にかかる機会などなど、一生に一度あるかどうかなのだ。

マルトーは興味深気に呟いた。

「そう、その通りです！ あと、色々と違いますからッ」

ようやく我に返ったロディは勢いよく頷いた。もちろん、誤解を解こうとする。

「やっぱりそうか、お前が気に掛ける女はシエスタと嬢ちゃん位なものな……」

だが、マルトーは神妙に頷くと、次第に気味の悪い笑みを浮かべ始めた。

（ま、まずいかも）

何かを思いついたルイズと酷似しているその笑みは、嫌でもその後の展開を想起させた。

「お前さんのように物静かな奴には、洗濯は天職だな！ へっ、

だがよ、下着だけつてのも情けなくはねえか？」

（ほら来た、ってそんな場合じゃなかった）

「ち、違いますからッ、ただ洗濯が好きただけですからッ！」

「洗濯なんて、メイド達に任せればいいだろう、それを好きでやるたあ俺には考えられねえ」

「そうなんですけど……雑用をやれ。とルイズに言われたんです。それに、その仕事を投げだしてしまうと、僕には使い魔以外で確かな理由が無くなってしまふんです……」

ロデイには明確な目的がない。

それは召喚されてから今まで、胸に残り続けているわだかまりだった。

ただでさえ、自らの存在意義を疑い始めているロデイには、与えられた仕事、自分が役に立てる仕事をこなすことでそれらを忘れてきたのだ。

「かー、折角の貴族の下着を手にしながら、そんなこと考えてたのか？ 俺には信じられん……」

まあ、悩むのもいいがお前さんを必要としている人達を忘れるなよ

？ 俺達平民は皆お前さんを必要としてる、シエスタだって……

それじゃあ不満かい？」

「あ、い、いいえ。ありがとうございます……」

マルトーはそう言った。確かに嬉しくはあるが、いまいち実感が湧かない。

ホムンクルスであるロデイは戦い以外での存在理由が欲しかった。

マルトーは言っていた。“平民の希望”と。

だが、それは貴族に対する力として見られているという事なのではないか？

恐らくマルトー達には他意はないのだろう。

しかし、平民と貴族。自分の在り方。様々な問題の答えが見えない現状では、言葉通りに受け取る事が出来なかった。

「お前さんは特殊だから、悩むなっつてのは無理かも知れねえが、

時には周りを頼ってみるよ

女の落とし方ならたんまり教えてやらあ」

ガハハ、と笑うマルト！。

ロデイも釣られて微笑んだ。

少し気持ちが軽くなったような気がした。

「何やってたのよ？ 洗濯にしては時間が掛かりだわ」

扉を開けると真っ先に主人の罵声が飛んできた。

マルトと話をしていた為、部屋に戻るのが遅れてしまったのである。

「ごめん、すぐに掃除始めるから」

「あつたりまえでしょ、早く終わらせちゃいなさい」

ルイズの部屋には装飾があまりない、召喚されたばかりの頃に貴族や王族の部屋は全て必要最低限の物しか置いてないのではないか、と思ってしまう程だ。

実際は一つ一つの家具や、布などにものすごいお金がかかっているらしい。

他の貴族などは更に飾りを付けると聞くから驚きだ。

ロデイはそんな高級な家具を労るように埃を取る。

「あら？ なんだか今日は丹念な仕事をするわね」

いつもと違う仕事振りにルイズが感心したように声を掛けてくる。

「そういえば最近、洗濯も上達してきたわね。あんたメイドとかに向いてるわ、なんか楽しそうなもの」

(メイド……)

確かに最近は日々上達を楽しむにしているが、メイドは無いだろう。他の言い方が思いつかなかったのだろうか？

「ん、そうだメイドで思いました。なんだっけアンタと仲が良いメイド？ シスターだっけ？

まあ名前はいいわ。その娘、買われていったらしいわよ」

「……は？」

「は？ じゃないわよ。だからそのメイドが買われていったのよ。……何よ、知らないと後悔するだろうと思って、教えてあげたのに……」

「シエスタが！？」

「そう、シエスタよシエスタ」

「な、なな何でッ！？」

「何でって、そりゃ、何処かの貴族の目になつたのでしょいうね。アンタが勘違いしないように言っけて置くけど、貴族に買われるって事は名誉なことなのよ」

ロディは愕然としていた。

人を買うという事に憤慨したロディだったが、まさか身近で起こると思ひもしなかつた。

考えられない事では無かつた。

なのに失念していたということは、結局、何処か他人事だったのであるのか？

「シエスタは、シエスタは同意したの？」

「さあ、そこまでは知らないわ。平民達なら詳しく知ってるんじゃない？」

さほど気にしていないルイズの一言いいたくもなつたが、それどころではなく、とにかく厨房に急ぐことにした。

「すぐ戻ってくるからッ！」

廊下に飛び出したロディはルイズの部屋に向かって叫ぶと、矢のように走りだした。

「……やっぱりこうなるとは思つたわ。

けど、扉くらい閉めて行きなさいよッ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8778e/>

鋼鉄の渡り鳥

2010年12月31日20時18分発行